

# 蔚屋北遺跡発掘調査概要・VII

大阪府教育委員会



## はじめに

寝屋川流域下水道なわて水みらいセンター建設に伴い、大阪府教育委員会が平成13年度より実施しております藤屋北遺跡の発掘調査は、当初の予想を大きく上回る調査成果を得ることとなりました。

特に古墳時代の集落跡の調査成果は、後に日本書紀等にみられる「河内馬劍」<sup>かわちのうまかい</sup>と呼ばれる、馬の劍育集團の集落の様子を知る上で大変重要かつ貴重なものということができます。多量の馬骨<sup>あまく�</sup>や馬歯の出土をはじめ、埋葬土坑から検出された馬の全身骨格、鎧<sup>よろい</sup>や轡<sup>つづら</sup>などの馬具の出土は、馬劍たちの集落の様子を具体的に伝えてくれる資料として広く注目を集めているところです。すでに調査を終えているA～E調査区については、その重要性と速報性を重視し、概要報告書を刊行しているところでございます。

この度は平成17年9月から平成18年12月まで発掘調査を実施した、管理棟・送風機棟建設予定地（約2,000m<sup>2</sup>）およびポンプ棟との背廊部分（約70m<sup>2</sup>）の調査概要を報告する運びとなりました。

本調査区からもその他の調査区と同様、古墳時代中・後期に属する集落跡が発見されました。集落跡からは、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸など多数の遺構や遺物が検出されました。特に集落域の西端を区切る大溝からは、土器、石器、木器、鉄器、鹿角製品など多種多様な遺物が出土しました。中でも黒漆塗りの木製鞍は、わが国最古級の馬具の出土例として重要であるだけでなく、過去の調査で出土しております鎧、轡と合わせ、この集落跡周辺に展開したであろう牧における、馬の装備を具体的に復元できる良好な資料である点で大変重要であるということができます。

このほかにも得られた本調査区の多大な成果は、これまでの成果に新たな知見を加えることになり、藤屋北遺跡における集落跡の具体像がより明らかになったということができます。

調査に際しましては、地元住民の方々をはじめ、大阪府都市整備部東部下水道事務所および四條畷市教育委員会、寝屋川市教育委員会など関係者の皆様に多大なご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げるとともに、今後とも本府の文化財保護行政に対しより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 富尾 昌秀

## 例　　言

1. 本書は寝屋川流域下水道なわて水みらいセンター建設に伴い、大阪府教育委員会が実施した四條畷市砂・蘿原所在の蘿原北遺跡F調査区の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は大阪府都市整備部の依頼を受け、大阪府教育委員会が文化財保護課調査第一グループ技師　岡田　賢（現：同課指定文化財グループ副主査）を担当者として実施した。最終遺構面の一部は同グループ技師　岩瀬　透の補助を受けた。調査期間は平成17年9月9日から平成18年9月15日まで、また首廊部分（F-3区）は平成18年11月20日から平成18年12月18日までである。遺物整理作業は、調査管理グループ主査　三宅正浩、副主査　藤田道子を担当者として実施した。
3. 調査にあたっては、四條畷市砂・蘿原自治会、寝屋川市堀溝自治会をはじめ、四條畷市教育委員会、寝屋川市教育委員会、大阪府都市整備部東部流域下水道事務所など、多くの方々のご協力を得た。記して謝意を表する次第である。
4. 写真測量は株式会社かんこうに委託した。なお写真フィルムは同社が保管している。
5. 本書に掲載した遺物写真は、有限会社阿南写真工房に委託した。出土木製品（木製鞍を除く）の保存処理は株式会社吉田生物研究所、また出土鉄製品、鹿角製品の保存処理は（株）京都科学に委託した。また古墳時代大溝の土壤分析は株式会社古環境研究所に委託した。
6. 出土木製鞍については、保存処理およびレプリカ作製を（株）京都科学に委託した。また塗膜の分析はパリノサーヴェイ株式会社に委託した。
7. 本書で用いた座標値は、日本測地系（平面直角座標第VI系）で、付図には世界測地系座標値を併記している。
8. 本調査の調査番号は05030（平成17年度）、06002（平成18年度）である。また首廊部分（F-3区）は06038である。
9. 本書の執筆・編集は岡田が行ったほか、一部編集は岩瀬が補助した。
10. 本書は300部印刷し、一部あたりの単価は903円である。

# 目 次

## はじめに

### 例 言

第1章 調査の経過 .....	1
第1節 既往の調査について .....	1
第2節 調査に至る経過 .....	2
第3節 調査の方法 .....	2
第2章 調査の成果 .....	5
第1節 基本層序 .....	5
第2節 調査成果の概観 .....	6
第3節 古墳時代中・後期の造構と遺物 .....	6
第3章 まとめ .....	51
第1節 藩屋北遺跡F調査区の古墳時代造構面について .....	51

# 挿 図 目 次

第1図 藩屋北遺跡の位置 .....	1
第2図 調査区位置図 .....	2
第3図 F調査区東壁および南壁土層断面図 .....	3・4
第4図 第11造構面（奈良時代水田面）平面図 .....	6
第5図 竪穴住居跡1・11平面図・断面図 .....	8
第6図 竪穴住居跡3・4・5平面図・断面図 .....	9・10
第7図 竪穴住居跡2平面図・断面図 .....	11
第8図 竪穴住居跡7・12平面図・断面図 .....	12
第9図 竪穴住居跡8・19平面図・断面図 .....	12
第10図 竪穴住居跡9平面図・断面図 .....	13
第11図 竪穴住居跡10平面図・断面図 .....	14
第12図 竪穴住居跡13平面図・断面図 .....	15・16
第13図 竪穴住居跡14平面図・断面図 .....	17
第14図 竪穴住居跡16平面図・断面図 .....	17
第15図 竪穴住居跡7・12カマド平面図・断面図 .....	18
第16図 竪穴住居跡8・10・16カマド平面図・断面図 .....	19
第17図 掘立柱建物跡1平面図・断面図 .....	21

第18図	掘立柱建物跡 2 平面図・断面図	21
第19図	掘立柱建物跡 4 平面図・断面図	22
第20図	掘立柱建物跡 6 平面図・断面図	22
第21図	掘立柱建物跡 7 平面図・断面図	23
第22図	掘立柱建物跡 8 平面図・断面図	24
第23図	掘立柱建物跡 9 平面図・断面図	24
第24図	掘立柱建物跡10平面図・断面図	25
第25図	井戸690平面図・断面図	26
第26図	井戸1168平面図・断面図	26
第27図	井戸944平面図・断面図	27
第28図	土坑1120平面図・断面図	29
第29図	各遺構出土遺物実測図 1	30
第30図	各遺構出土遺物実測図 2	31
第31図	各遺構出土遺物実測図 3	32
第32図	谷 1 ・ 大溝土層断面図	33
第33図	大溝出土土器実測図 1	36
第34図	大溝出土土器実測図 2	37
第35図	大溝出土土器実測図 3	38
第36図	大溝出土土器実測図 4	39
第37図	大溝出土土器実測図 5	40
第38図	大溝出土土器実測図 6	41
第39図	大溝出土土器実測図 7	42
第40図	大溝出土土器実測図 8	43
第41図	出土鉄器・鹿角製品実測図	45
第42図	出土木器実測図 1	46
第43図	出土木器実測図 2	47
第44図	木製鞍実測図	48
第45図	谷 2 ・ 流路529土層断面図	50

## 図 版 目 次

図版 1 上段：蒲屋北遺跡遠景（北西より）

下段：調査区全景（東より）

図版 2 調査区全景（真上より）

- 図版3 上段：第13遺構面（西より）  
下段：集落域の検出状況（東より）
- 図版4 上段：竪穴住居跡1（南東より）  
下段：竪穴住居跡2（南東より）
- 図版5 上段：竪穴住居跡2・3・4・5  
下段：竪穴住居跡7・12（西より）
- 図版6 上段：竪穴住居跡8・19（北より）  
下段：竪穴住居跡9（北より）
- 図版7 上段：竪穴住居跡1カマド検出状況（南より）  
中段：竪穴住居跡1床面中央部の炭化物層検出状況（南より）  
下段：竪穴住居跡1床面土器検出状況（南より）
- 図版8 上段：竪穴住居跡2カマド完掘状況（南より）  
中段：竪穴住居跡3カマド完掘状況（南東より）  
下段：竪穴住居跡4カマド検出状況（南東より）
- 図版9 上段：竪穴住居跡7カマド検出状況（西より）  
中段：竪穴住居跡12カマド検出状況（西より）  
下段：竪穴住居跡12床面製塙土器検出状況
- 図版10 上段：竪穴住居跡13（北東より）  
中段：竪穴住居跡10（南より）  
下段：竪穴住居跡10カマド検出状況（北より）
- 図版11 上段：竪穴住居跡16（南より）  
中段：竪穴住居跡16カマド検出状況（南より）  
下段：竪穴住居跡16カマド完掘状況（南より）
- 図版12 上段：掘立柱建物跡1（北東より）  
下段：掘立柱建物跡2（東より）
- 図版13 上段：掘立柱建物跡7  
下段：掘立柱建物跡8・9
- 図版14 上段：井戸690底面提瓶出土状況  
中段：井戸944木器出土状況（南より）  
下段：井戸944底面カゴ出土状況
- 図版15 上段：井戸1168土層断面  
中段：井戸1168遺物出土状況 下段：溝634遺物出土状況（西より）
- 図版16 上段：土坑1120遺物出土状況（東より）  
中段：土坑1120土器出土状況（西より）

下段：土坑1120鳥足紋土器近影

図版17 上段：大溝上層遺物出土状況1（西より）

中段：大溝上層遺物出土状況2（北より）

下段：大溝上層遺物出土状況3（南より）

図版18 上段：大溝中層遺物出土状況1（北より）

中段：大溝中層遺物出土状況2（東より）

下段：大溝中層遺物出土状況3（東より）

図版19 上段：大溝上層提瓶出土状況

中段：大溝上層木製鍊出土状況

下段：大溝中層韓式系土器出土状況

図版20 上段：大溝中層木製鞍出土状況

中段：大溝中層さしづ形木製品出土状況

下段：大溝中層鐵製鑿出土状況

図版21 上段：竪穴住居跡出土土器（5世紀代）

下段：竪穴住居跡出土土器（6世紀代）

図版22 上段：大溝出土土師器

下段：大溝出土須恵器

図版23 上段：大溝出土韓式系土器

下段：溝625出土須恵器火甕（右）、大溝出土須恵器甕

図版24 上段：溝1062出土遺物

下段：溝625出土遺物

図版25 出土鉄器・鹿角製品

図版26 出土木器1

図版27 出土木器2

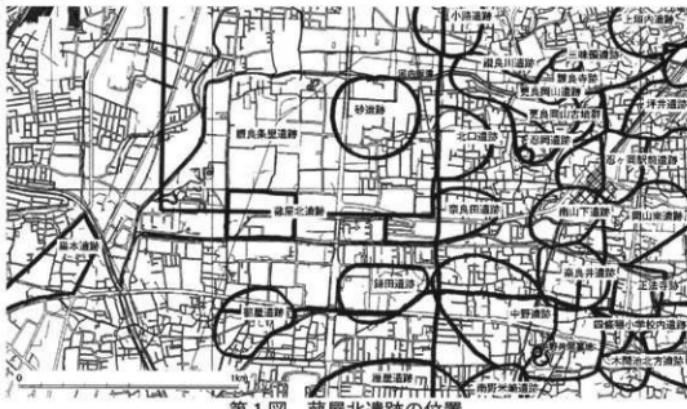
第1章 調査の経過

## 第1節 既往の調査について

四條畷市藤屋・砂に所在する藤屋北遺跡（第1図）は、生駒山地から西流する岡部川や枚方丘陵から南流してくる讚良川などの河川によって形成された沖積低地に立地する、弥生時代から近世にいたる複合遺跡である。本遺跡は、なわて水みらいセンターの建設に伴う試掘調査（平成13年）によって発見された。試掘調査時より設定トレチのいずれの調査地点からも古墳時代中期の遺構と遺物が確認される予想外の結果を得ることとなり、出土遺物からは当該時代の馬の生産や飼育に関わる遺跡であることが推測された。

平成13年度から順次開始した発掘調査（A～E調査区）の成果のうち、古墳時代中期から後期の遺構面からは、本遺跡を特徴付ける成果を得ている。各調査区からは浅い谷や溝により隔てられる微高地が検出され、その上に竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸、溝などが密集して検出され、本遺跡が当該期の集落跡であることが判明した。中でも馬の埋納土坑の検出（A調査区）など、各調査区から検出される馬歯、馬骨、また輪鏡（下水竪孔地区）、鎌轡（E調査区）の発見など、集落の性格が「馬」の飼育に関わるものであることが、調査の進展により強く示唆されることとなった。

また多数の韓式系土器などの朝鮮半島との関連が強い遺物は、集落を営んだ集団の故地を推測させるとともに、井戸枠に転用された多数の準構造船の部材（A・B・C・E調査区）は、西に望む河内湖への交通手段を復元する具体的な資料を提供している。馬骨や韓式系土器などは、鎌田遺跡や奈良井遺跡など四條畷市域の複数の遺跡からも出土しており、この付近に朝鮮半島からの渡来集団によって形成された「馬飼」と密接に結びついた集落が点在していたことを、具体的に示しているといえる。



第1図 萩屋北遺跡の位置

## 第2節 調査に至る経過

なわて水みらいセンター建設に伴う都屋北遺跡の発掘調査は、水処理施設、砂ろ過施設、沈砂池棟などの各施設の建設予定地で順次行われ、試掘調査を含めると調査開始から既に6年が経過し、面積は約23000m<sup>2</sup>を測る。これら各調査区の成果は概要報告として既に刊行されているところである。本書で報告するのは、このうちの管理棟・送風機棟の建設予定地で、F調査区の成果である（第2図）。調査は平成17年9月に開始し、平成18年9月に終了した。面積は約2000m<sup>2</sup>である。

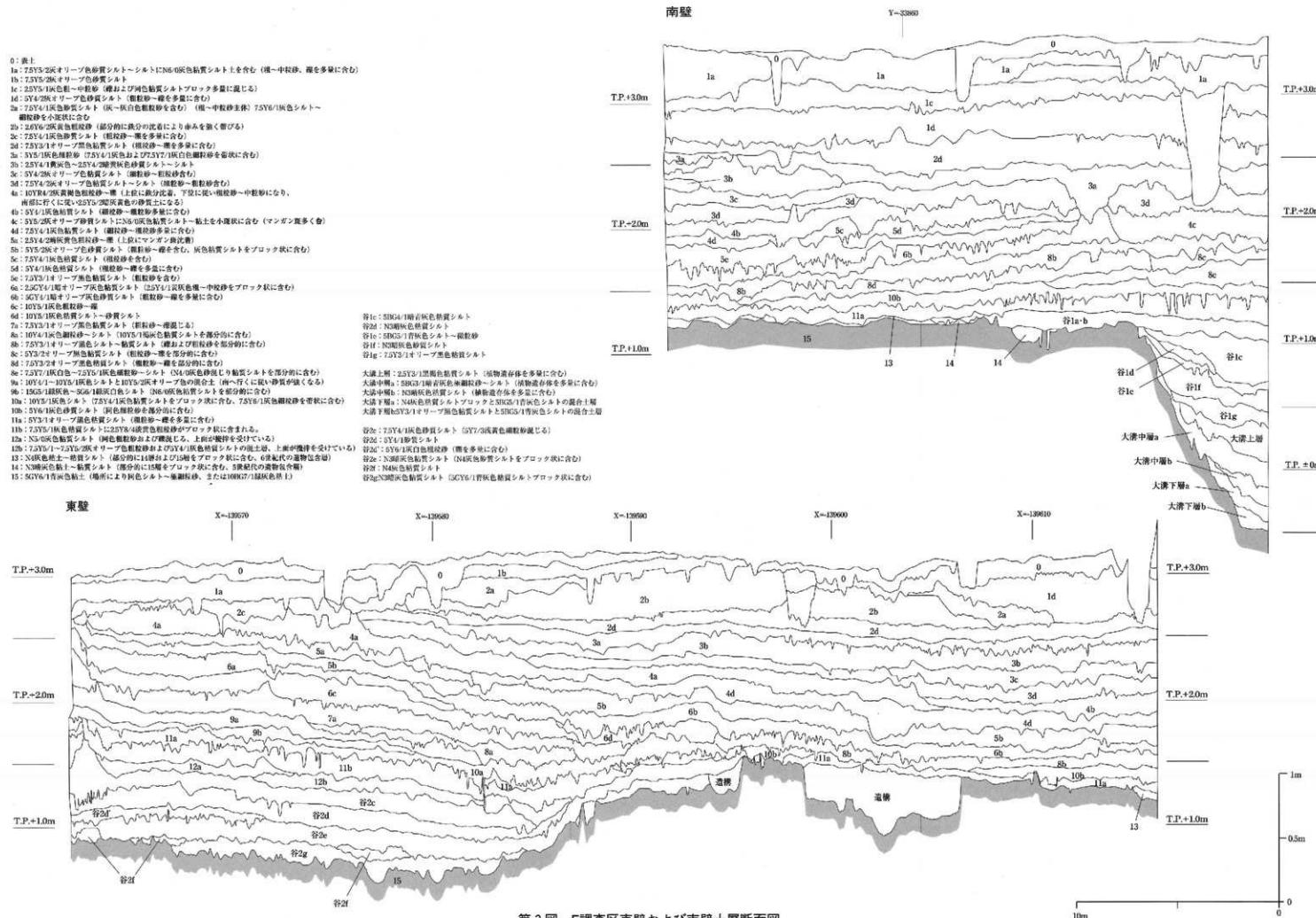
## 第3節 調査の方法

調査区の地区割りは従前のことと同様である。1/25000地形図（都市計画図）を基本としてこれを300等分し100m四方の区画を設定する。これを南北にA～O、東西に1～20の組合せで地区表示する。このためF調査区はI6-12-A19区とI6-12-B19区にまたがっていることになる。さらに各地区を100等分して10m四方の区画を設定し、この区画を南北a～j、東西1～10の組合せで表示し、遺構や遺物の記録・取上げの基準としている。調査区は北半部をF-1区、南半部をF-2区とした。またD調査区とF調査区をつなぐ背廊部分をF-3区とした。F-3区の調査成果については、他の背廊部分と合わせて別に報告する予定である。

検出遺構は第1遺構面から通番で番号を与え、それに遺構種別を冠して表記した（溝1075、井戸855など）。ただし竪穴住居跡と掘立柱建物跡はこれらとは別に新たに通番を与えていた。



第2図 調査区位置図



第3図 F調査区東壁および南壁土層断面図

## 第2章 調査の成果

### 第1節 基本層序

基本層序としてF調査区東壁および南壁の土層を示す。(第3図)。

第1層は灰色～灰オリーブ色系の砂質シルトを主体となる。上面で近世の犁溝等を検出している(第1遺構面)。第2層は灰黄色粗～中粒砂からなる洪水砂を主体とし、上面で畝溝となる南北方向の溝を多数検出している近世の耕作土であるが、調査区内では本層上面で部分的に島畠が検出されている(第2遺構面)。洪水砂の堆積以前の水田耕作土(2d層)までが近世に属する。

第3層は灰色系の砂質シルトを主体とし、中世に属する水田面を検出している(第3遺構面)。第4層は灰白色系の粗～中粒砂と灰黃褐色粘質土で鉄分の沈着が顕著にみられる。上面で溝や土坑、ピット、井戸、畦畔を検出している。F-1区では中世(12世紀末～13世紀)の集落域を検出し、F-2区では水田面を検出している(第4遺構面)。F-1区とF-2区の境目付近で南側に1段落ち、集落域と水田域とに分かれている。第5層はF-1区では灰黄色系の砂礫層となり、上面で中世の集落域を検出している。またF-2区ではオリーブ黒色系の粘質シルトとなり水田城を検出している(第5遺構面)。

第6層は暗オリーブ灰色系の砂質シルトを主体となる。本層以下の第11遺構面までは、調査区全域が水田面となる。本層の水田面はF-1区北部を西流する自然流路529の浸漬土によって南側に堤防状の土手を築いている。この土手は古代以降中世まで継続的に構築される。本層上面の水田面は第6遺構面である。第7層は黒色系の粘質シルトで、F-1区にて検出された。上面で水田面を検出している(第7遺構面)。第8層はオリーブ黒色系の粘質シルトを主体とし、調査区全体で条里方向に沿う畦畔が検出される初現となる水田面である(第8遺構面)。所屬時期は平安後期と考えられる。第9層は灰色～緑灰色シルトを主体とする。F-1区北半に分布し、上面で水田面を検出している(第9遺構面)。第10層は灰色系の粘質シルトでF-1区北半に分布している。上面で水田面を検出している(第10遺構面)。第11層はオリーブ黒色系の粘質シルトで、上面で奈良時代に属する水田面を検出している。西半の水田区画は、その下層の古墳時代の谷地形の影響を受けていると考えられる(第11遺構面・第4図)。第12層はオリーブ灰色系の粘質シルトを主体とする。F-1区の谷2最上部の堆積土である。上面で水田面を検出している(第12遺構面)。

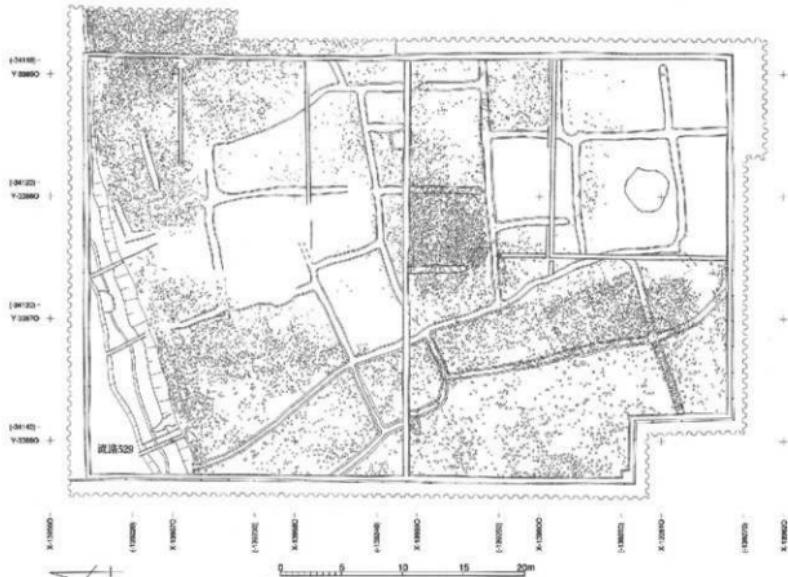
第13層は灰色粘質シルトで、調査区全体で検出されている。6世紀の遺物包含層である。第14層は暗灰色粘土を主体とし、第15層をブロック状に含む5世紀の遺物包含層である。第13層に比べ層厚は一定せず、6世紀代の集落形成によって攪乱を受けていたため部分的に検出された。本層が理土となる遺構は出土遺物との対応関係においても5世紀代に属する遺構としてよいと考えられる。第15層は青灰色粘土～シルトで、西に行くほどシルト～微粒砂・細粒砂となる。古墳時代中・後期遺構面のベースとなる(第13遺構面)。無遺物層である。

## 第2節 調査成果の概観

T.P.+3.0m付近で確認した1層上面を第1遺構面（近世）とし、以下古墳時代中・後期の最終遺構面まで、計13面の遺構面を検出した。

第1・2遺構面は共に近世の耕作地で、第1面は犁溝群、第2面は南北方向に幅3mの島畠を痕跡的に検出している。特に島畠は、郡部川方面から運搬された厚い氾濫堆積物の砂疊層（第4層）に覆われた水田の復旧も兼ねていたようで、砂疊層の搔揚げは下層の水田耕土（5層）まで達していた。南側からの洪水砂層の堆積は第4層のみで、それ以下では常に北側からの堆積であった。これは、調査区北側を流れる自然流路の氾濫の影響が、中世集落が検出される第5層の堆積によって解消されたことと関係する。第3・4遺構面は中世に属す。両遺構面ともに、F-1区とF-2区の境目で南へ1段落ちており、この段差を境にF-1区では犁溝や畝溝、ピット、井戸からなる集落域が、またF-2区では南北方向の畦畔で区画される水田域であることが判明した。この集落域は、D-1調査区でも検出されており、上述の自然流路の氾濫により盛り上がった砂疊層をベースにしている。

第5～11遺構面は奈良時代～平安時代の水田面を検出している（第4図）。この時期の水田面は上述の自然流路に沿うように浚渫土や氾濫土砂を利用して構築された堤の南側に形成され続ける。



第4図 第11遺構面（奈良時代水田面）平面図

### 第3節 古墳時代中・後期の遺構と遺物

#### 1) 遺構面概観（付図、図版2・3）

12層下には6世紀の遺物包含層である13層が、さらにその下に5世紀の遺物包含層である14層が堆積していた。このうち14層は層厚が一定せず、12層から明確に連続堆積を確認できる所は面的に狭く、薄く堆積しているか、または遺構面のベースである15層が露呈するところが大部分であった。したがって15層上面で両時期の遺構を検出し第13遺構面として調査を行った。

第13面では南東-北西方向の微高地上に竪穴住居、掘立柱建物、井戸などで構成される集落跡を検出した。その西側は谷状に大きく落ち込む地形になり（谷1）、谷の底面では南南東-北北西方向に人工的な溝（大溝）が掘られていた。この溝はE調査区で検出された大溝090001の延長部分である。また微高地の北側はD調査区から続く深い谷（谷2）がある。

#### 2) 竪穴住居跡

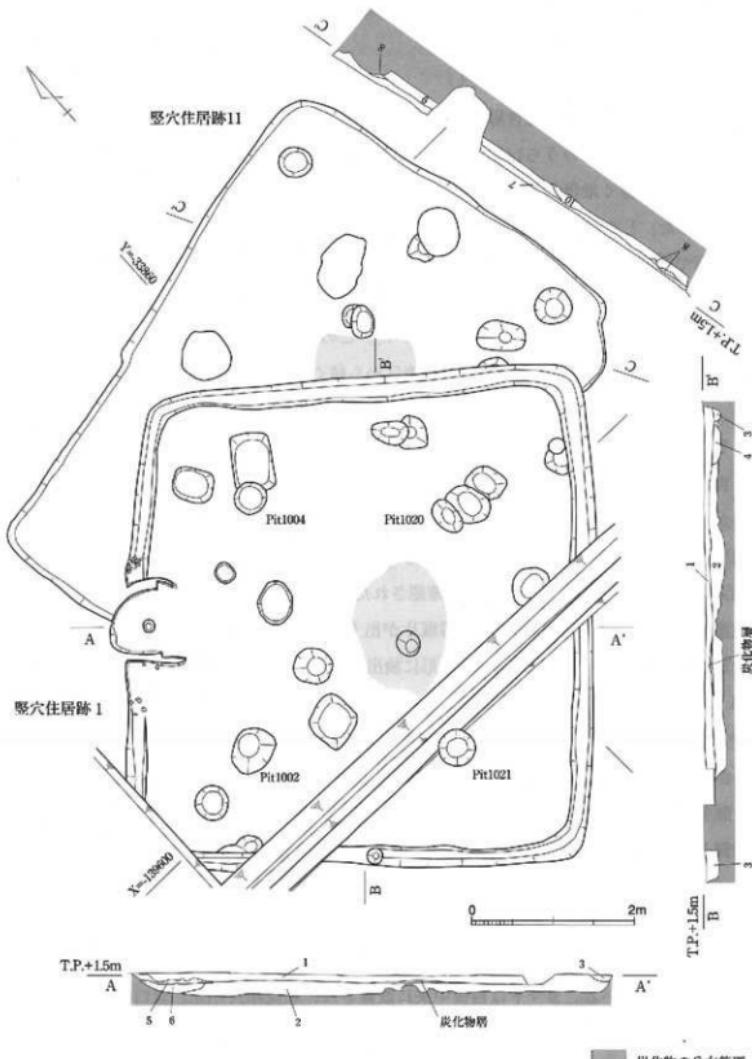
5世紀中頃～6世紀後半にかけての竪穴住居跡は19棟確認した。狭い微高地上に複雑に重複しながら検出され、プランの確認や主柱穴の確定は困難を伴った。主なものについて略述する。

竪穴住居跡1（第5図、図版4上段）は調査区の中央部で検出された。プランは5.8m×5.7mの隅丸方形で、北西部分を除いて壁溝が確認された。北壁の中央にカマドを配する（図版7上段）。燃焼部長0.95m、焚口幅約0.7mで土師器瓶片が出土している（図版同下段）。プラン中央の床面上に草本や木本類の炭化物と焼土塊が円形に検出された（図版同中段）。主柱穴はPit1001、1002、1020、1021である。6世紀末に属する。

竪穴住居跡2（第7図、図版4下段）はF-2区東端中央で検出された。一部分が調査区外であるが、プランは一辺6mの隅丸方形で、東壁の一部で壁溝を確認している。床面から滑石製勾玉、鋸歯紋の線刻がある滑石製紡錘車などが出土している。カマドは竪穴住居跡1と同様に北壁に設置し、全長1.3m、焚口幅0.75mで土師器甕が出土している（図版8上段）。主柱穴はPit976、977、978、979である。6世紀末に属する。

竪穴住居跡3（第6図、図版5上段）は竪穴住居跡2に切られおり、主軸は竪穴住居跡2に対して西に約45度傾く。プランは一辺約5.8mの方形を呈すると考えられる。西壁から南壁の一部で壁溝を確認している。カマドは西壁中央に設置され、燃焼部長1.1m、焚口幅0.6mで土師器高杯を支脚に転用している（図版8中段）。主柱穴はPit1052、1072、1074、1083である。6世紀後半～末に属する。

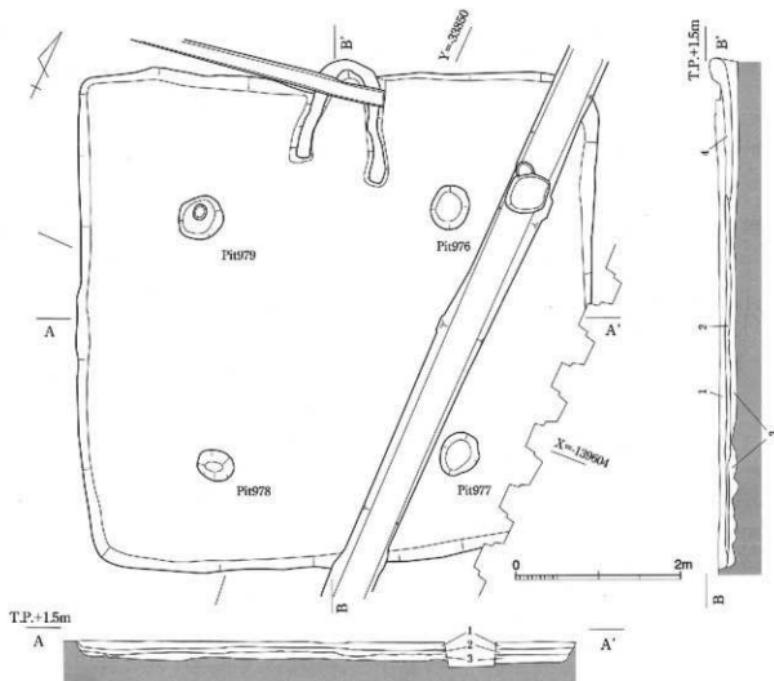
竪穴住居跡4（同図、同図版）は竪穴住居跡2・3・5に切られ部分的な検出であるが、竪穴住居跡3と同方向に主軸をとる、一辺6.6mの隅丸方形に復元できる平面プランをもつ。カマドは西壁中央に設置され、燃焼部長1.1m、焚口幅0.6m、土師器甕が出土している（図版8下段）。6世紀中頃～後半に属す。主柱穴はPit1081、1241が考えられるが、それ以外は不明確である。



第5図 堅穴住居跡 1・11平面図・断面図



第6図 縫穴住居跡 3・4・5平面図・断面図



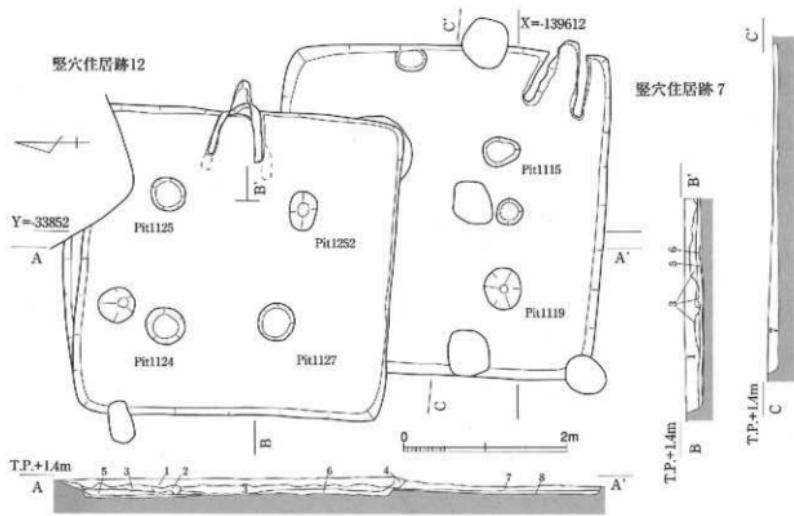
1: N4灰色粘質シルト(炭化物混じる)  
 2: N4灰白色粘質シルト(SY7/4灰黄色粘粒物を帶状に含む、炭化物混じる)  
 3: SBG6/1青灰色粘質シルト(N4灰色粘質シルトをブロック状に含む)  
 4: 7SY4/1灰色粘質シルト(SBG6/1青灰色粘質シルトをブロック状に含む  
 炭化物混じる)

#### 第7図 壇穴住居跡2平面図・断面図

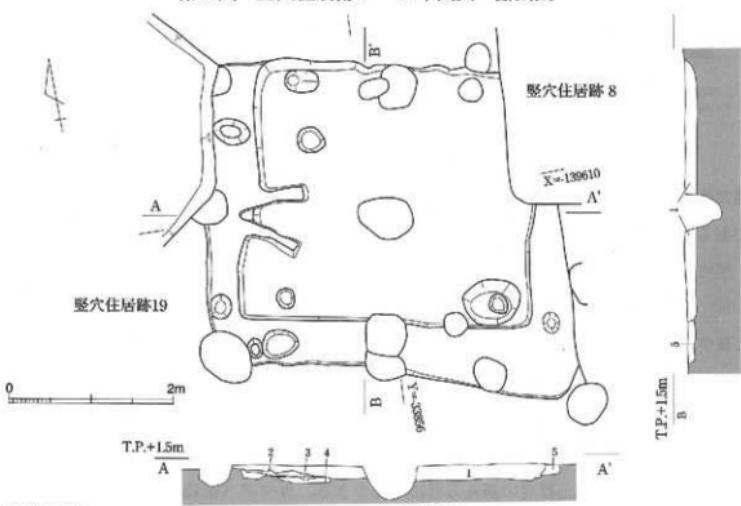
壇穴住居跡5（同図、同図版）はプランが複数回切られており、コーナーの一部を検出したのみであるが、平面プランは一辺5.2mの方形に復元できる。北壁中央にカマドが設置されていたが、壇穴住居跡3の構築時に壊され、炭化物の広がりを部分的に確認したのみである。主柱穴はPit1087、1186、1195、1246で、1195は壇穴住居跡2のカマド下で検出された。6世紀中頃～後半に属す。壇穴住居跡2～5については、ほぼ同一の場所で建替えを行っており、重複関係から、壇穴住居跡4→5→3→2の順で構築されている。特に壇穴住居跡3～5はTK10型式段階において、カマド位置を西壁と北壁と交互に変えながら構築されていることが確認された。

壇穴住居跡7（第8図、図版5下段）はF調査区南東隅で検出した。壇穴住居跡12に切られているが、平面形は一辺4m程度の隅丸方形に復元できる。カマド（第15図、図版9上段）は東壁の南東隅で検出された。燃焼部長0.9m、焚口幅0.5mで土師器甕が出土している。主柱穴はPit1115、1119であるが、北辺の2柱穴は検出できなかった。5世紀後半に属す。

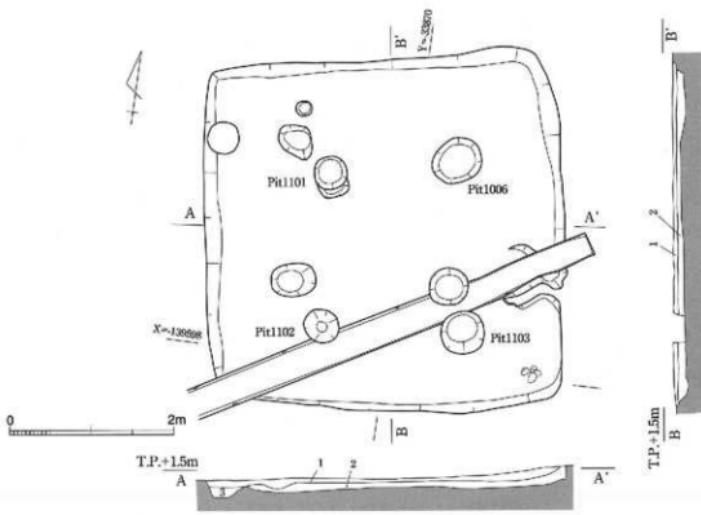
壇穴住居跡8（第9図、図版6上段）は壇穴住居跡7および12の西側で検出された。平面形



第8図 堅穴住居跡 7・12平面図・断面図



第9図 堅穴住居跡 8・19平面図・断面図



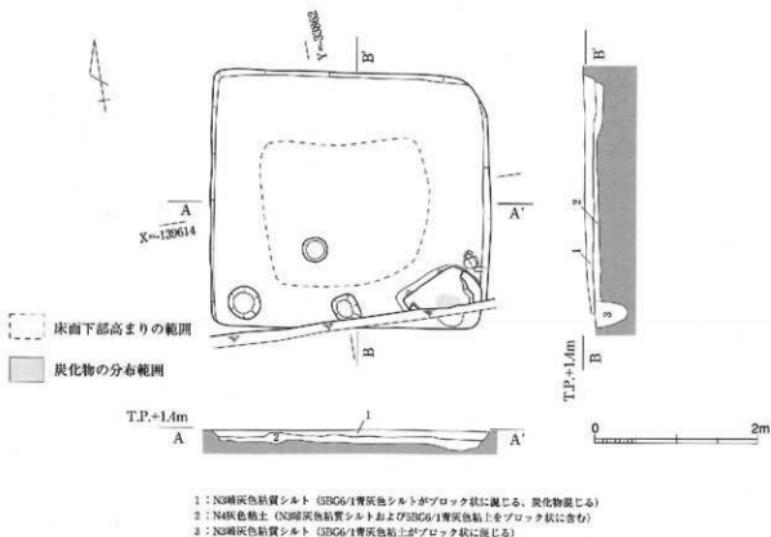
第10図 竪穴住居跡9平面図・断面図

は3.2m×3.5mの方形で主柱穴は明確でない。カマド（第16図）は西壁中央に設置され、燃焼部長0.8m、焚口幅0.5mである。土師器高杯を支脚に転用していた。主柱穴は不明である。5世紀中～後半に属する。

竪穴住居跡9（第10図、図版6下段）はF-2区中央の大溝肩近くで検出された。平面形は一辺4.3mの方形である。カマドは谷1に設定したトレチ3によって削平されたが、東壁のやや南よりに設置されており、残存長0.5m、残存幅0.3mである。所属時期は、南東隅の床面上で検出された處から5世紀中頃に比定でき、F調査区で検出された竪穴住居跡の中で最も古い住居跡の1つである。主柱穴はPit1101、1102、1103、1006である。

竪穴住居跡10（第11図、図版10中段）はF-2区南端中央で検出された。平面形は3.4×3.1mの隅丸方形で、本調査区で検出された住居跡の中では最も規模が小さい。主柱穴となる明確なピットは検出されなかった。床面下部の中央部でベース面が小マウンド状に高まっている。住居の構築の際、プランの中央部を掘り残すように高まりを形成し、その上に床面を作っていると考えられる。カマドは南東隅に設置されている（第16図、図版10下段）。カマドの左側から土師器壺と製塩土器が出土している。5世紀中頃に属する。

竪穴住居跡11（第5図）は竪穴住居跡1に切られているが、平面形は7.4m×5.0mの長方形を呈する。竪穴住居跡1と同様に、床面の中央部で、草本類の炭化物と焼土塊が円形に検出された6世紀後半に属する。



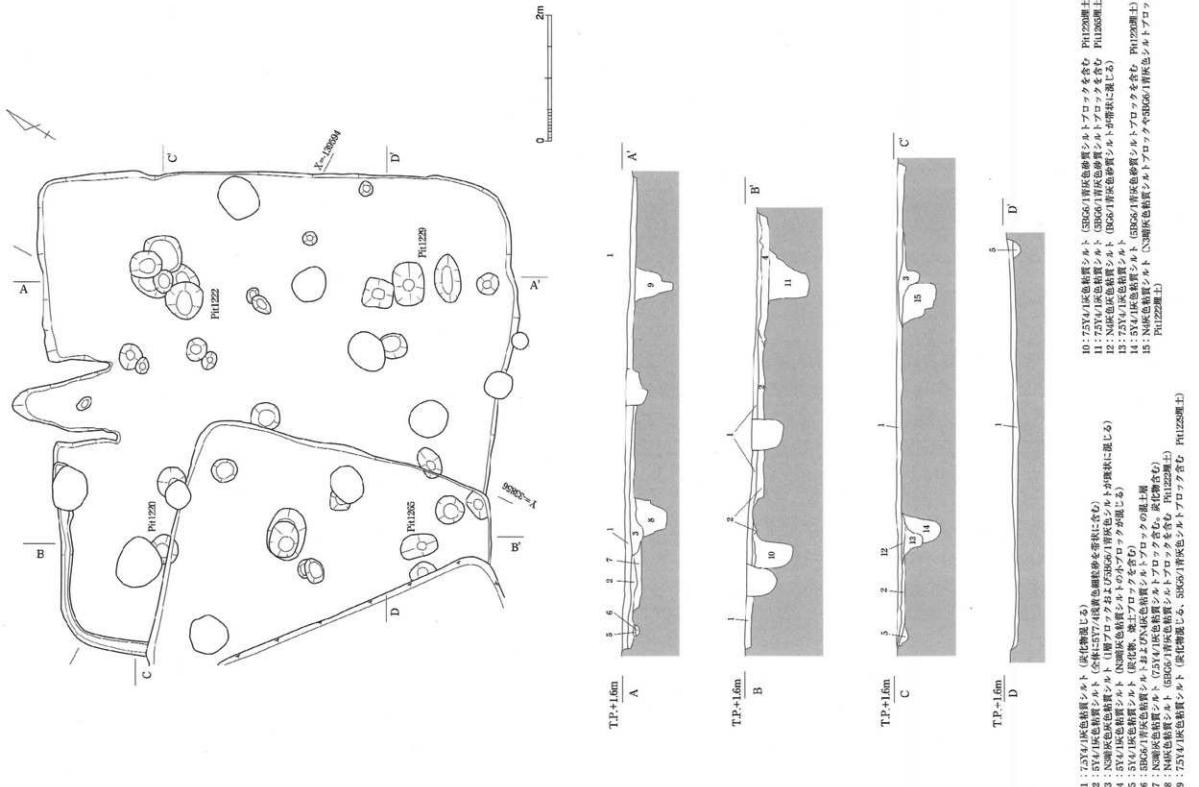
第11図 壇穴住居跡10平面図・断面図

壇穴住居跡12（第8図、図版5下段）は壇穴住居跡7、壇穴住居跡8を切るように検出された。平面形は4.2m×3.7mの隅丸方形である。床面からは、砥石、滑石製白玉が出土しており、南東隅からは製塙土器が2個体分出土している（図版9下段）。カマド（第15図、図版9中段）は東壁中央に設置され、燃焼部長0.75m、焚口幅0.65mである。遺存状態は比較的よく、煙道部（残存長0.4m）も残存する。カマド内から土師器甕や韓式系土器片が出土している。主柱穴はPit1124、1125、1127、1252である。5世紀後半に属す。

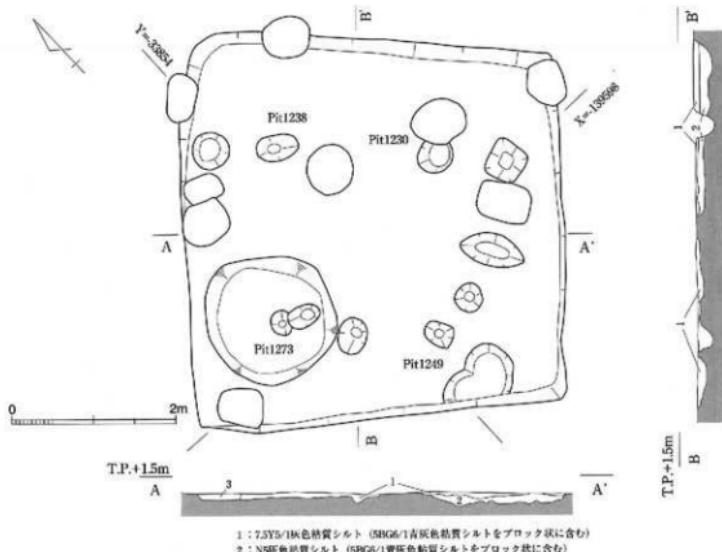
壇穴住居跡13（第12図、図版10上段）はF-2区北部で検出された。壇穴住居跡11に切られる。平面形は7.7m×7.5mの隅丸方形で、本調査区検出の住居跡中で最大である。カマドは北壁中央に設置され、燃焼部長1.6m、焚口幅0.9mでこれも本調査区中最大である。カマド内からは土師器甕が出土している。主柱穴は東西3列ずつ配されていると考えられるが、西列については掘立柱建物10の柱穴と重なり検出されていない。6世紀中頃～後半に属す。

壇穴住居跡14（第13図）は壇穴住居跡4や13などの堀方下でプランを検出した。平面形は一辺4.5mの隅丸方形である。カマドは北東壁の中央にあったが、壇穴住居跡13構築時に削平されおり、焼土と炭化物が部分的に検出されたにとどまる。主柱穴はPit1230、1238、1249、1273である。5世紀後半から6世紀前半に属すると考えられる。

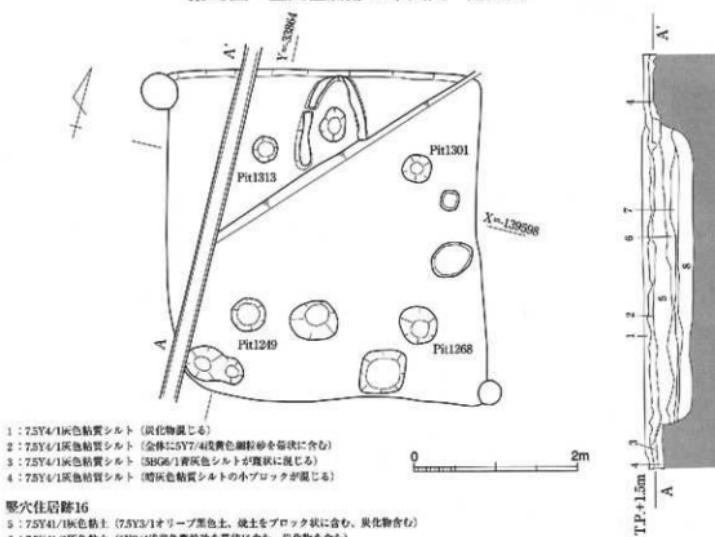
壇穴住居跡15は、壇穴住居跡1や11などに切られているが、これらの堀方下でプランの一部を検出しておらず、一辺3.8mの隅丸方形になると考えられる。5世紀後半に属す。



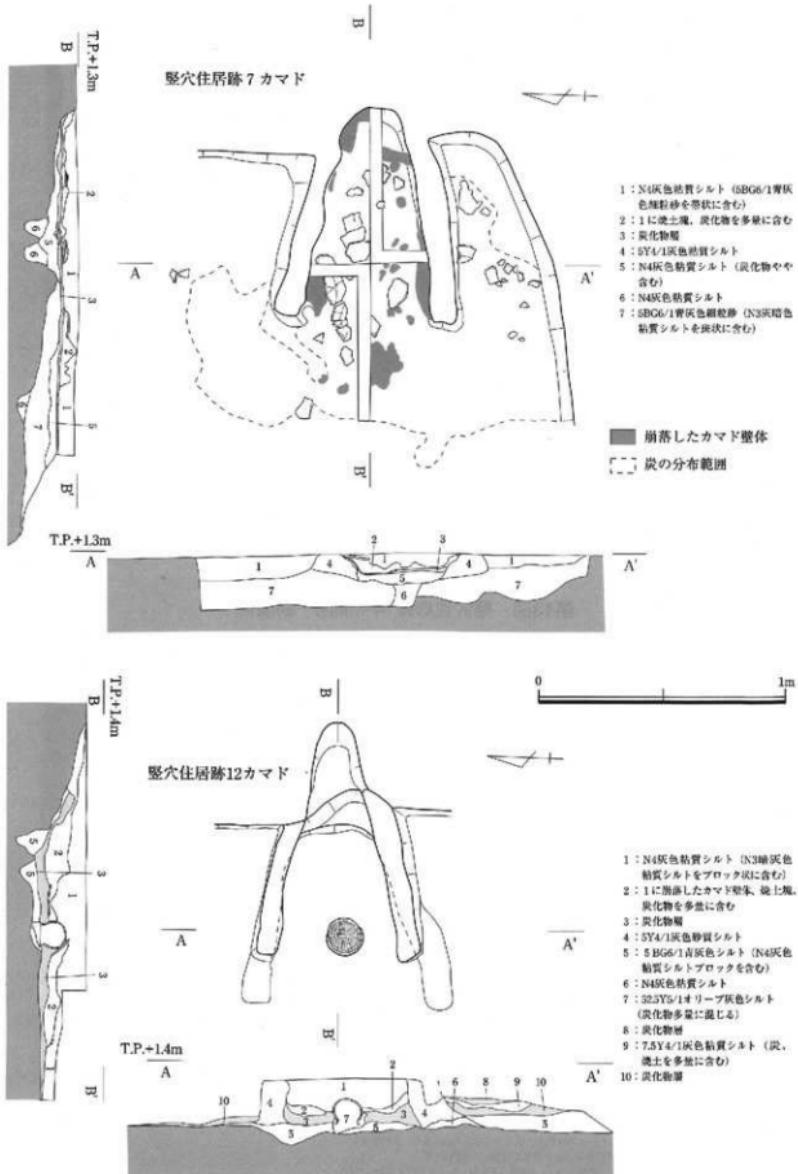
第12図 積穴住居跡13平面図・断面図



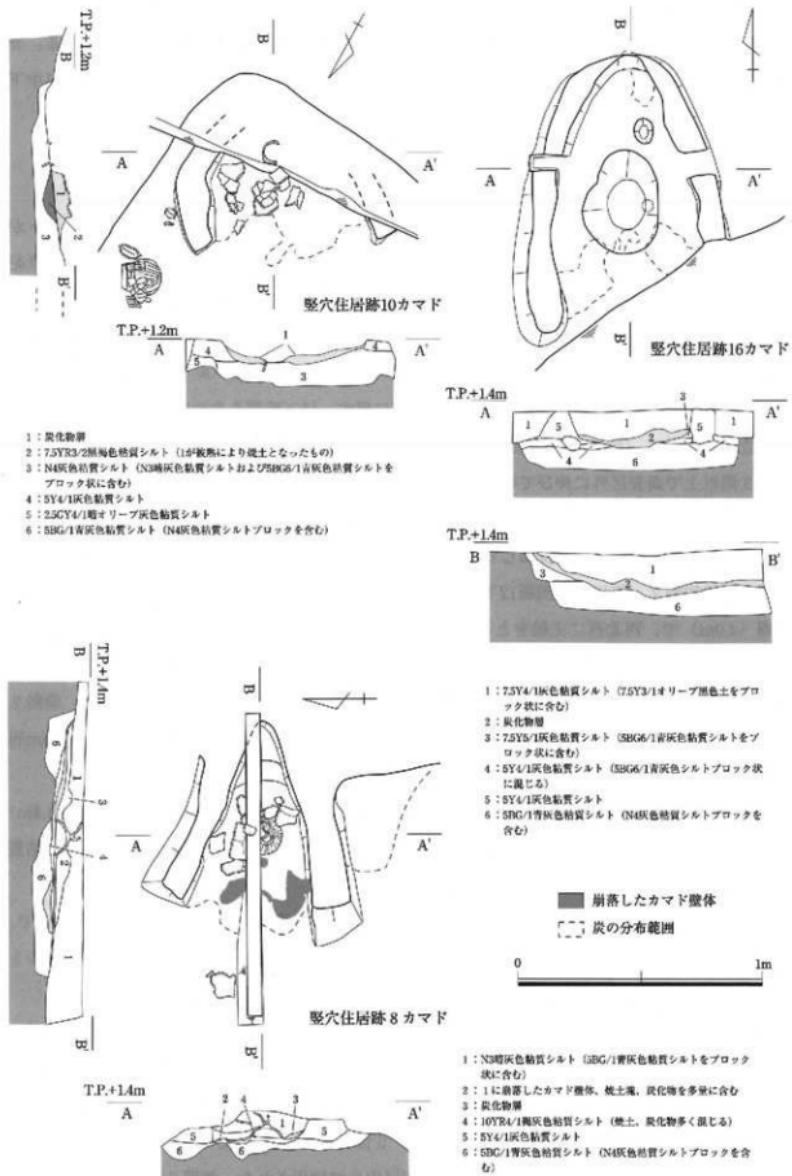
第13図 積穴住居跡14平面図・断面図



第14図 積穴住居跡16平面図・断面図



第15図 堅穴住居跡 7・12カマド平面図・断面図



第16図 堅穴住居跡 8・10・16カマド平面図・断面図

堅穴住居跡16（第14図、図版11上段）はF-2区中央で検出した。堅穴住居跡1によって切られている。平面形は4.0m×3.8mの方形である。主柱穴はPit1313、1301、1268、1249である。カマドは北壁中央に設置され（第16図）、燃焼部長1.1m、焚口幅0.6m（復元）である（図版11中下段）。5世紀後半に属す。

### 3) 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は10棟確認しているが、今後の再検討で数棟増える可能性はある。各ピットからの出土遺物は少なく、遺構の時期決定は困難な面もあるが、ピット埋土のあり方で概ね6世紀代か5世紀代かの区別は可能である。すなわち、13層の灰色粘土～粘質シルトを基本とし、これにベースである15層の青灰色粘土～シルトのブロックを含むものや、14層の暗灰色粘質シルトのブロックを含むものが主に6世紀代に属し、14層の暗灰色粘質シルトにベースの青灰色粘土～シルトをブロック状に含むものが主に5世紀に属す。以下時期を含め略述する。

掘立柱建物跡1（第17図、図版12上段）はF調査区中央東端で検出した。梁間3間（4.3m）、桁行3間以上で調査区外に伸びている。主軸は西北西にとる。Pit710には柱が残存していた。柱穴は径0.6m程度の円形であり、埋土は灰色粘土～粘質シルトである。所属時期は6世紀後半である。ピットの1つから柱を検出している。

掘立柱建物跡2（第18図、図版12下段）はF-1区南東部で検出した。梁間3間（4.2m）、桁行3間（4.9m）で、西北西に主軸をとる。柱穴は径0.5m程度の円形を呈し、埋土は灰色粘土ないしは粘質シルトである。所属時期は6世紀後半である。

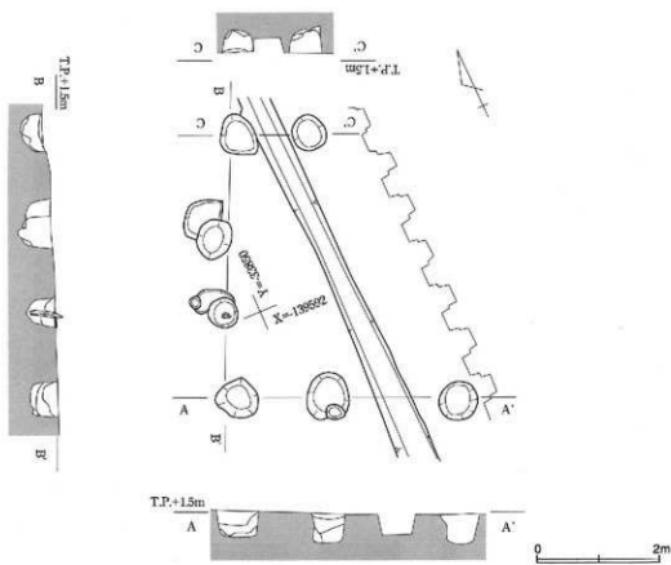
掘立柱建物跡3はF-2区中央東よりで検出された。堅穴住居跡4、6を切っている。梁間2間（3.2m）、桁行2間（3.6m）で総柱になるとみられる。主軸は北北東にとる。柱穴は径0.5m程度の円形で、埋土は灰色粘土から粘質シルトである。所属時期は6世紀後半である。

掘立柱建物跡4（第19図）はF調査区中央で検出した。梁間2間（3.6m）、桁行2間（4.4m）の総柱となり、主軸は北北東にとる。柱穴は径0.7m程度の円形や不整形で、埋土は灰色粘質シルトである。所属時期は6世紀後半である。

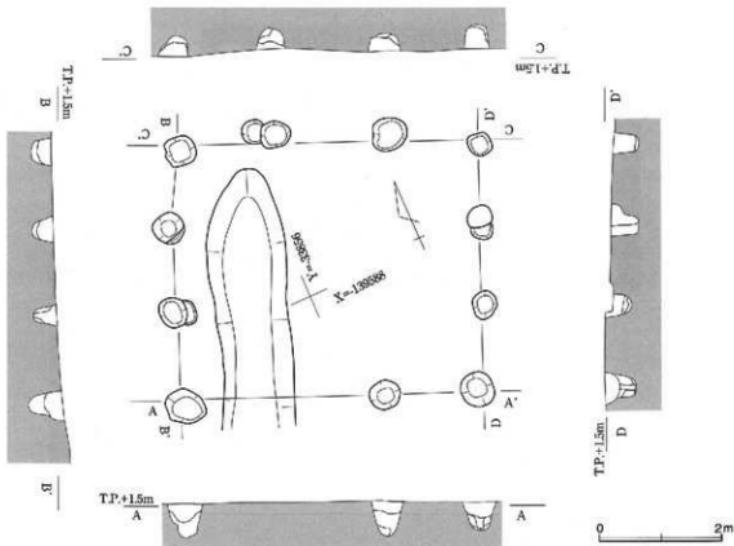
掘立柱建物跡5は掘立柱建物跡4に切られている。梁間2間（3.4m）、桁行3間（4.0m）で、西北西に主軸をとる。柱穴は径0.4m程度の不整形や方形で、埋土は暗灰色～灰色粘質シルトである。所属時期は5世紀後半である。

掘立柱建物跡6（第20図）は堅穴住居跡13に切られており、西辺および南辺についてはピットが検出できなかったが、梁間3間（3.8m）、桁行4間以上（4.6m以上）で、北北西に主軸とする。東辺は掘立柱建物跡1の柱穴によって切られている。柱穴は方形～略方形で一辺50cm程度を測る。埋土は暗灰色粘土～粘質シルトである。5世紀後半に属する。

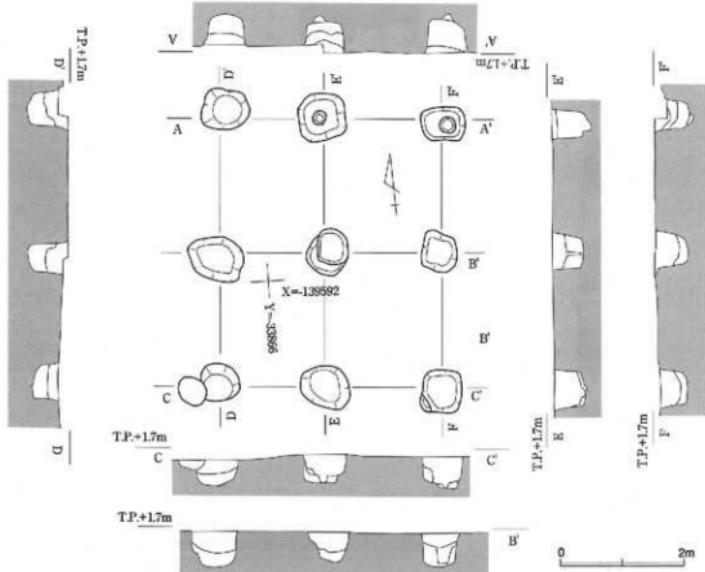
掘立柱建物跡7（第21図、図版13上段）はF-2区中央で検出された。梁間3間（4.3m）、桁行3間（4.5m）の総柱で、北北西に主軸をとる。柱穴は径0.6m程度の円形、不整形、方形で、埋



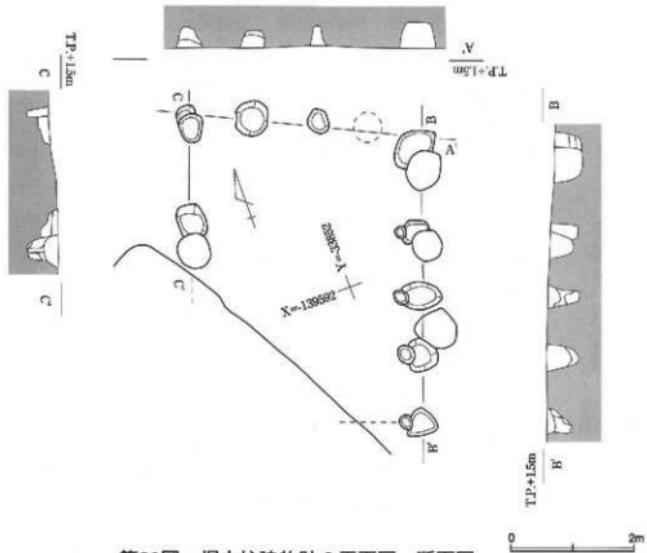
第17図 掘立柱建物跡 1 平面図・断面図



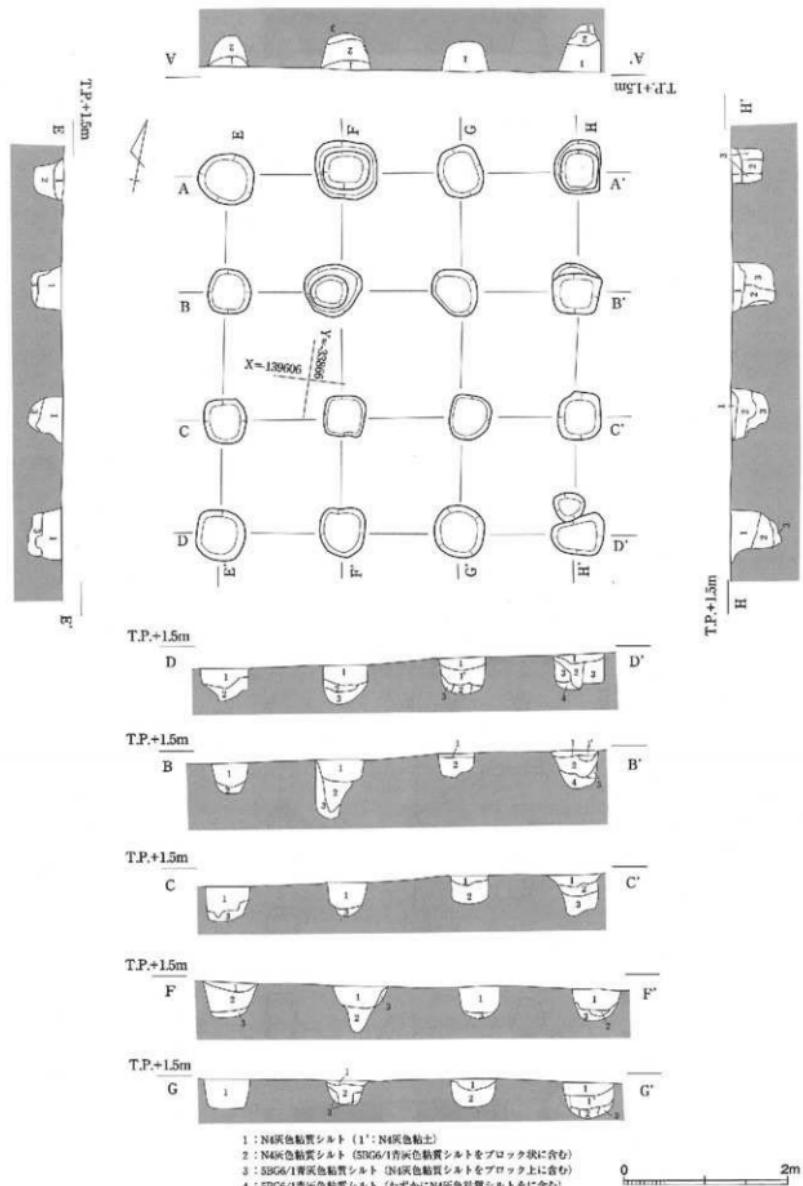
第18図 掘立柱建物跡 2 平面図・断面図



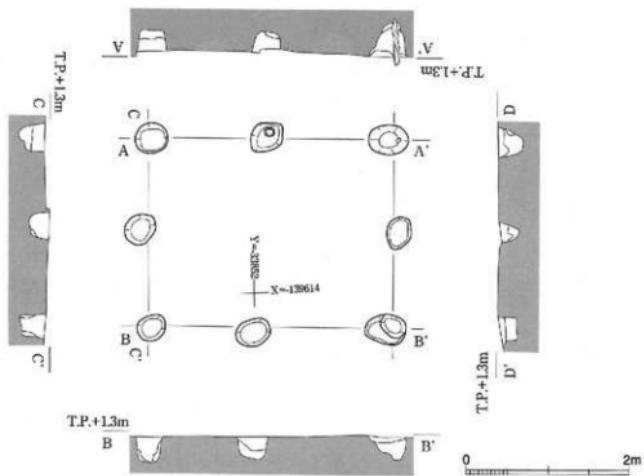
第19図 掘立柱建物跡 4 平面図・断面図



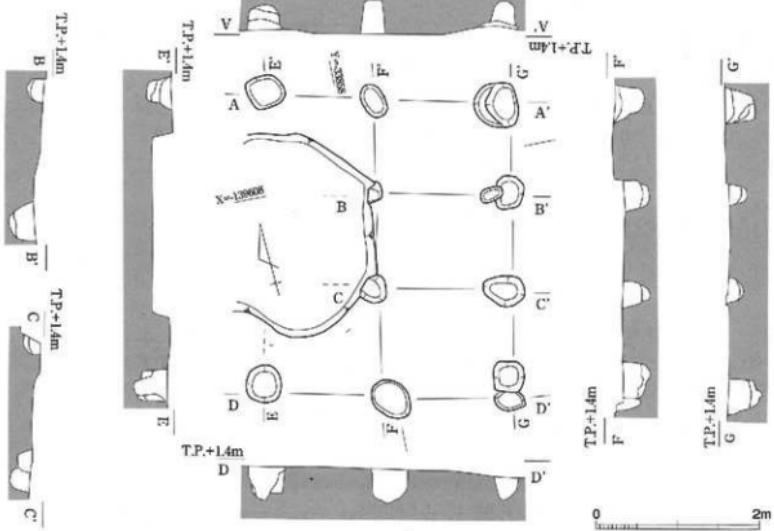
第20図 掘立柱建物跡 6 平面図・断面図



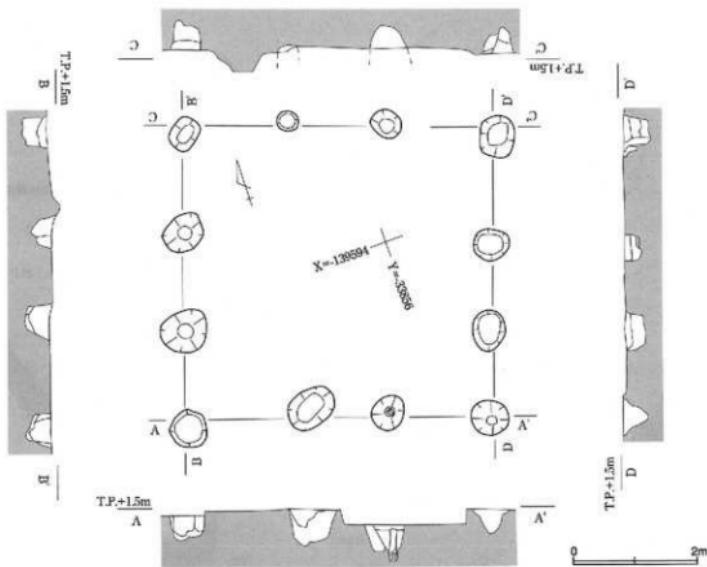
第21図 挖立柱建物跡 7 平面図・断面図



第22図 挖立柱建物跡 8 平面図・断面図



第23図 挖立柱建物跡 9 平面図・断面図



第24図 挖立柱建物跡10平面図・断面図

土は灰色粘質シルトである。所属時期は6世紀後半である。

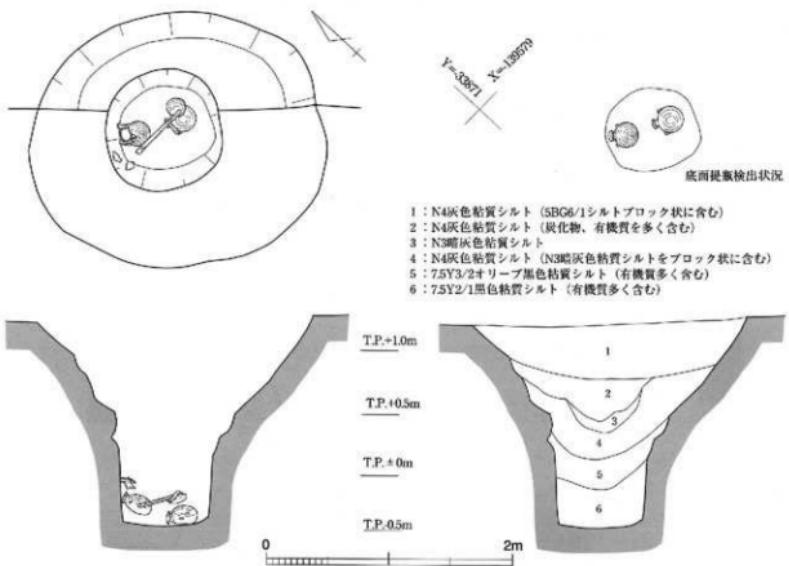
掘立柱建物跡8（第22図、図版13下段）はF-2区南東部で検出された。竪穴住居跡7を切っている。梁間2間（3.1m）、桁行2間（3.9m）である。主軸はほぼ西にとる。Pit925からは柱根が検出され、Pit1110からは埋土から多量の炭塊が出土している。柱穴は径0.5m程度の円形を呈し、埋土は灰色粘質シルトである。所属時期は6世紀後半である。

掘立柱建物跡9（第23図、図版13下段）は竪穴住居跡8の西側で検出された。梁間2間（3.9m）、桁行3間（4.3m）の総柱になると考えられる。柱穴は径0.6m程度の円形で、埋土は灰色粘質シルトである。主軸は北北西にとる。所属時期は6世紀後半である。

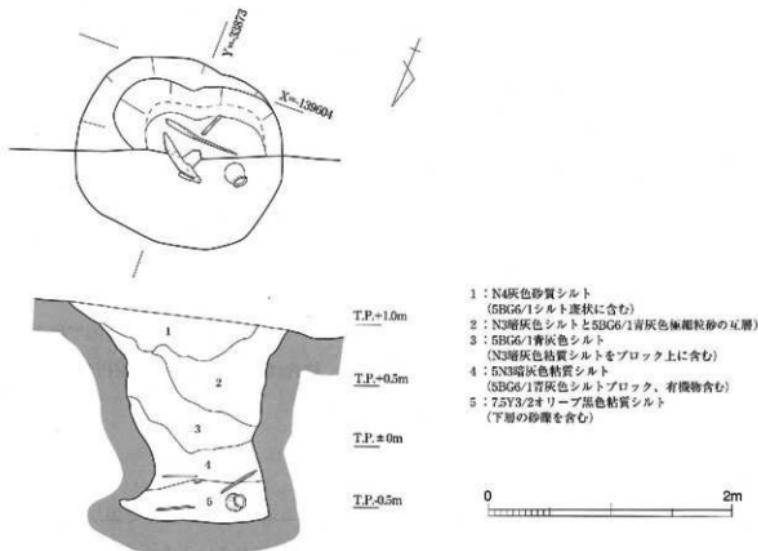
掘立柱建物跡10（第24図）はF-2区の北部で柱穴は検出された。梁間3間（4.7m）、桁行3間（5.0m）で、北北西に主軸をとる。竪穴住居跡13を切っている。また竪穴住居跡11内で堀方下からピットを検出したため、竪穴住居跡11の方が新しい。柱穴は径0.6m程度の不整円形や方形で、埋土は灰色粘質シルトである。所属時期は6世紀後半である。

#### 4) 井戸

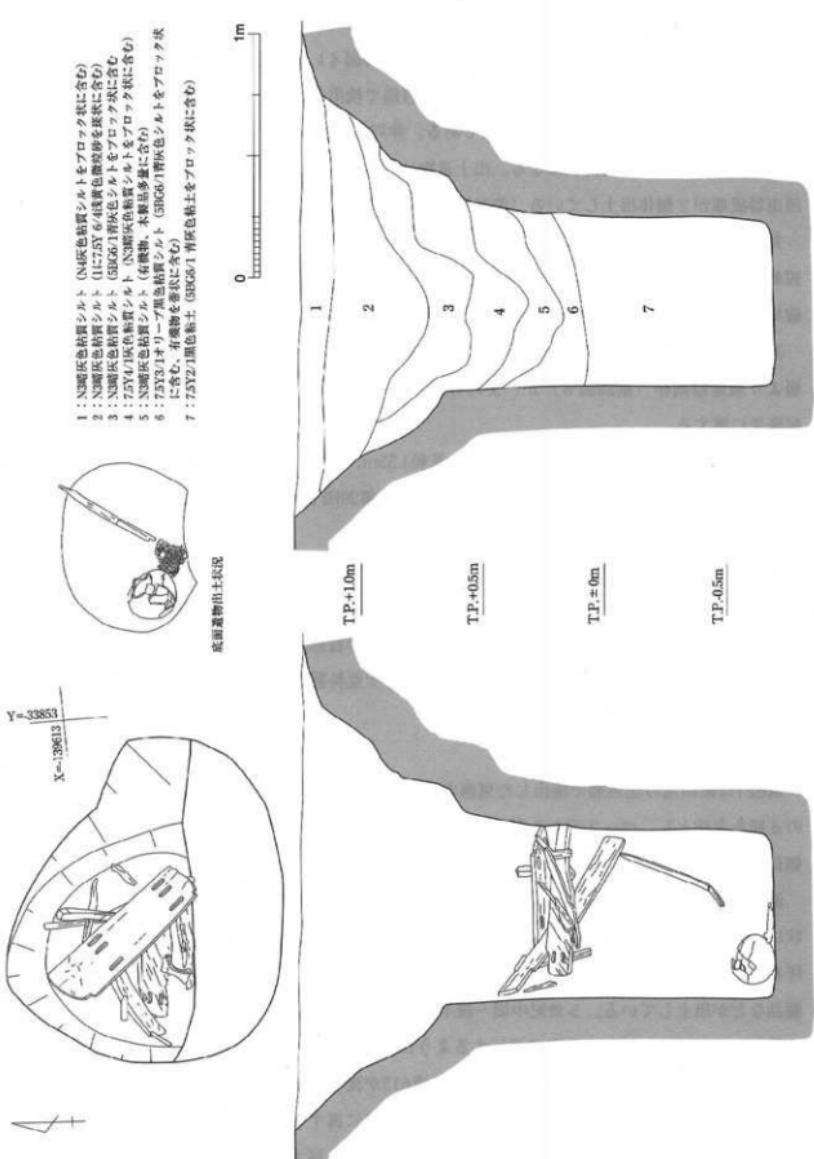
井戸は6基検出している。いずれもベースである15層よりも下位の砂層まで掘り込んであるため、当時の湧水点もこの砂層中であろう。他の調査区で検出されているような船材を枠に転用したものはみられず、素堀りのものばかりである。



第25図 井戸690平面図・断面図



第26図 井戸1168平面図・断面図



第27図 井戸944平面図・断面図

井戸627はF-1区の北東部、谷2の東部で検出した。平面形は長軸1.95m、短軸1.4mの橢円形で、深さは1.2mである。出土遺物は土師器の鉢（第29図4）がある。5世紀後半に属する。

井戸690（第25図、図版14上中段）はF-1区西部で検出された。谷2の肩部に掘り込まれている。長軸2.25m、短軸2.2m、深さ1.65mである。井戸上半部分は播鉢状を呈するが、下半部分は堀方が直ぐに落ち、円筒状になる。出土遺物は中層から須恵器坏身や韓式系土器が、下層から須恵器提瓶が2個体出土している（第30図1～13）。6世紀中～後半に属する。

井戸1168（第26図、図版15上中段）はF-2区西部の谷1肩部付近で検出された。長軸1.8m、短軸1.3mで不正円形を呈し深さ1.7m以上である。出土遺物は土師器壺（第29図6）や曲柄又鉢破片（第42図2）などが出土している。5世紀後半に属する。

井戸806は井戸1168の南東で検出された。長軸1.1m、短軸1.05m、深さ1.4mである。埋土の2層より須恵器高杯（第29図8）が、また井戸底より土師器壺（同図9）が出土している。5世紀後半に属する。

井戸855は井戸806の南東で検出された。長軸1.55m、短軸1.35mの橢円形を呈し、深さ1.4mである。出土遺物は土師器のミニチュア土器がある（第29図5）、埋土の状況から6世紀代に属すると考えられる。

井戸944（第27図、図版14中下段）はF-2区南東部で検出された。竪穴住居跡7に切られている。長軸1.3m、短軸1.1m程度、深さ1.9mである。出土遺物は土師器壺（第29図1・2）のほか、中層から船の舷側板などの木製品、最下部からは枝状の自然木とともにカゴが出土している。2本越え2本潜り1本送りの網代編みされたものでタケ亜科製である。

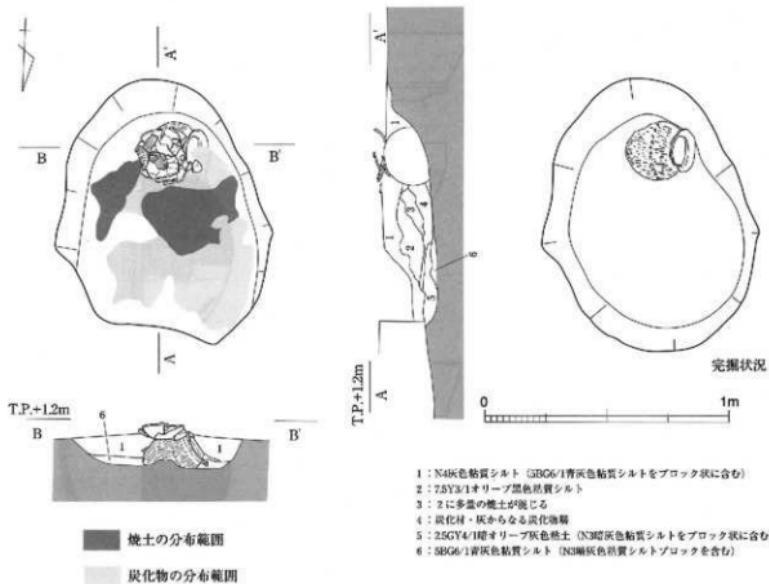
## 5) 溝・土坑

溝621は微高地の北西端で検出した東西方向の溝で、谷1に向かって開いている。埋土は谷1のd層を主体とし、ベースである青灰色細粒砂まで掘り込まれている。最下部から円筒埴輪が1個体分出土しているが、それ以外には出土遺物はない。

溝625（第45図）はF-1区北西端からF-3区にかけて検出された。南西から北東にかけて弧状に巡り、D-1区で検出された集落域に含まれる溝である。埋土は暗灰色粘質シルトで須恵器坏身、蓋、腹、土師器壺など（第31図7～24、図版23下段・24下段）、製塙土器、U字形板状土製品などが出土している。5世紀中頃～後半に属する。

溝613および856は溝625の南で平行するように検出された。溝856は暗灰色系の粘質シルトで5世紀中頃の溝であるが、それを切るように溝613が流れている。溝856からは須恵器坏身などが出土している（第31図1～6）。5世紀中頃～後半に属する。溝613は灰褐色系の粘質シルトで須恵器の他に馬とみられる獸骨も出土しており6世紀代に属する。共に溝625と同様にD-1区で検出された北西居住域を区切る役割をもっていると考えられる。

溝633は調査区の中央東より北北東～南南西に検出された。南端は竪穴住居跡13によって切



第28図 土坑1120平面図・断面図

られている。埋土は灰色粘土の上層と暗灰色粘質シルトの下層に分けられ、最深部で0.4mを測る。埋土からは焼土塊や炭化物を検出している。出土遺物から5世紀後半に属する。

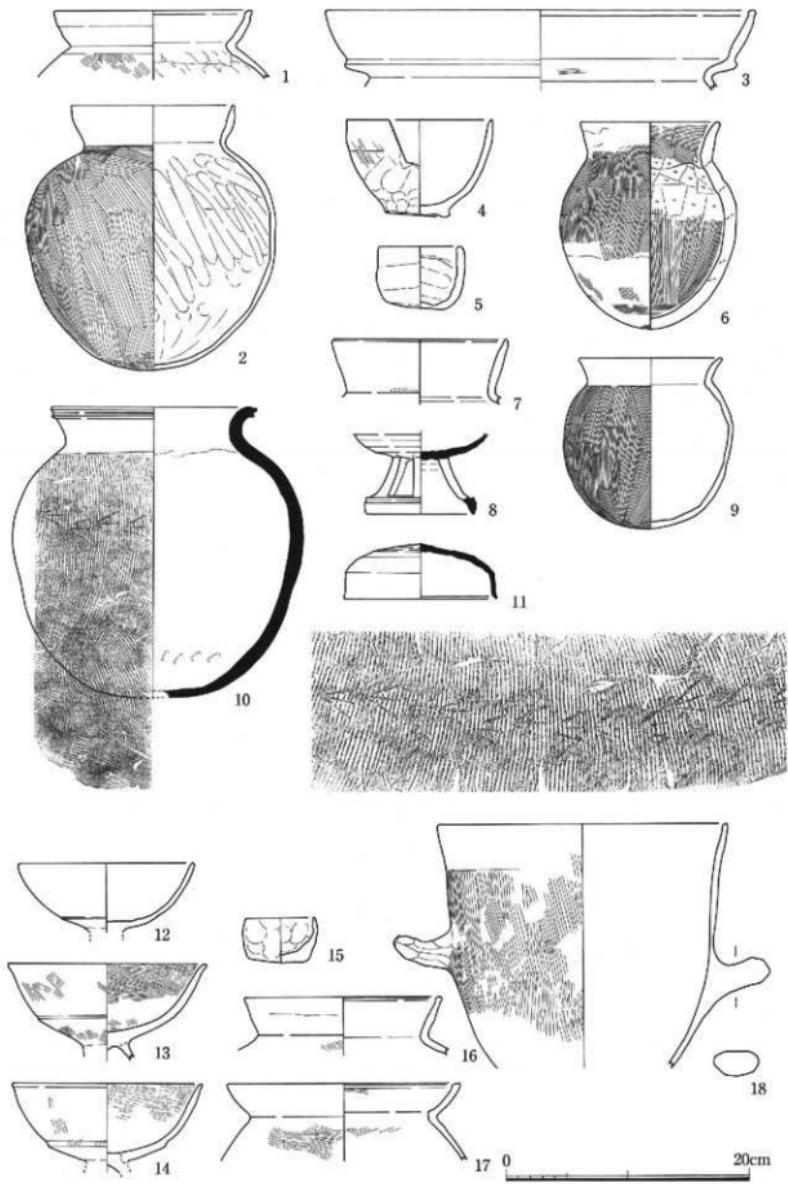
溝634(図版15上段)は溝633の北東で検出した浅い溝で、最深部で0.15mを測る。埋土は灰色粘質シルトであり焼土塊や炭化物が面的に広がっていた。6世紀前半に属する。

溝724は調査区中央の東端で南北方向に検出された。最深部で0.4mを測る。溝の南端付近から土師器壺等(第29図12~18)が出土している。5世紀後半に属すると考えられる。

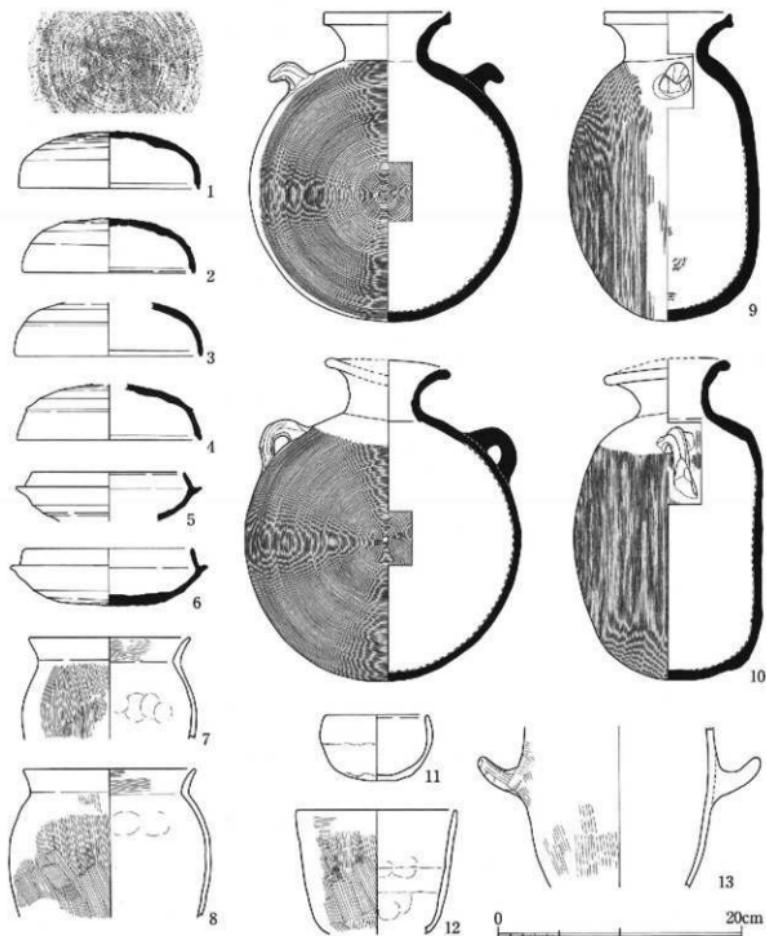
溝1062は調査区の南東端で検出した東西方向の溝である。E調査区へ取り付く苔廊へと拡張した部分で検出したため、溝幅が分かるのは部分的である。最深部でT.P.+0.5mを測り、埋土は上下2層に分かれる。上層は灰色粘土に下層のブロックが混じり、下層は暗灰色粘土にベースの青灰色粘土ブロックが混じる。上層は概ね6世紀代の堆積であるが、下層は5世紀後半の須恵器等を含む(図版24上段)ことから、溝の掘削は5世紀後半には行われたものと考えられる。

溝1075は溝1062に切られているが、調査区の南東端で検出された溝である。埋土は暗灰色粘土にベースの青灰色粘土ブロックを含む。東西方向から南北方向へ屈曲し調査区の南へと伸びている。溝内からは土師器壺が出土しており5世紀後半に属する。

土坑1120(第28図、図版16)は調査区の南端部で検出された、長軸1.1m、幅0.9mの楕円形の土坑で、深さは0.2mである。土坑南端は溝1062の肩によって切られている。埋土は最上層が灰色粘土で溝1062の埋土と類似している。最下層は暗灰色粘土にベースの暗緑灰色粘土ブロック

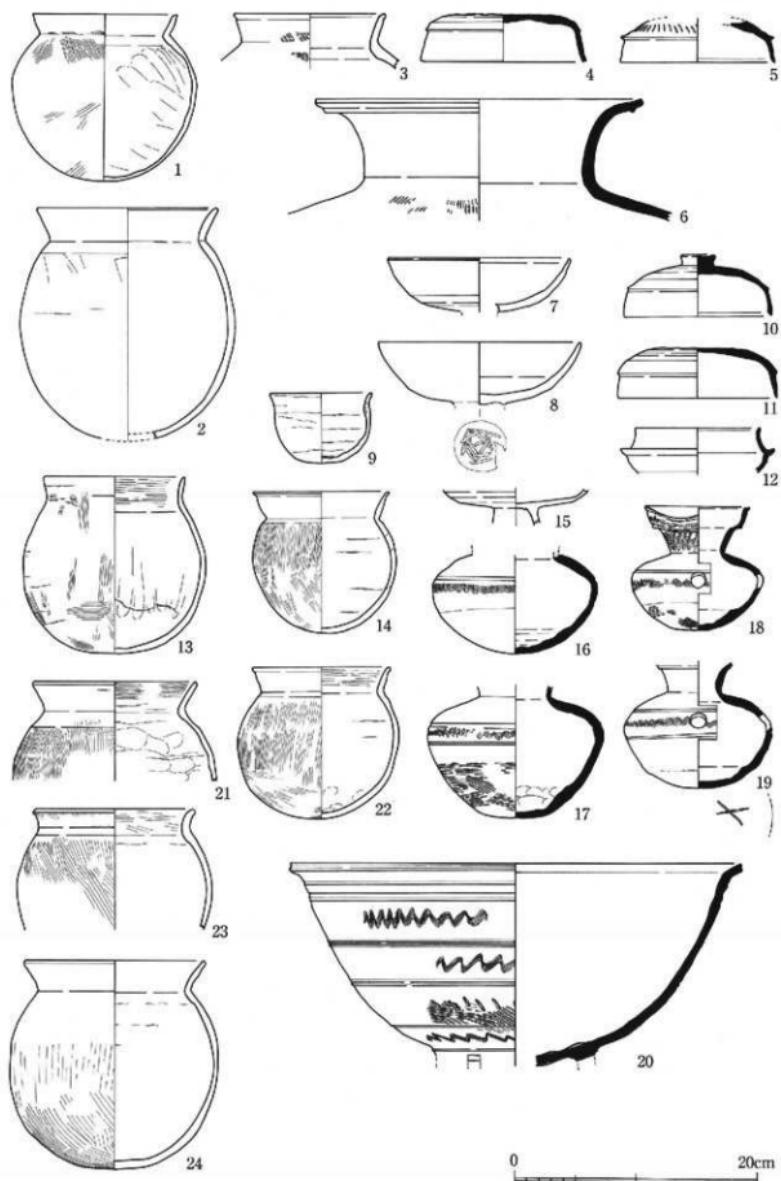


第29図 各遺構出土遺物実測図 1



第30図 各遺構出土遺物実測図2

が混じる。その間に炭化物を多く含む粘質土と焼土塊を含む粘質土がみられる。土坑内からは鳥足紋をほどこした陶質土器が検出された（第29図10）。これは胴部の一部から底部を欠くものの、全体形が復元できる例としては貴重な資料である鳥足紋は部分的に列が乱れるものの、胴部上半に一条めぐらされている。炭化物層および焼土塊を含む粘質土層はこの陶質土器の口縁部内からも検出されており、これらは土坑内に伴っていたものと考えられる。また陶質土器に接するようないぬ蓋が検出されている（第29図11）。このいぬ蓋から土坑の所属時期は5世紀後半と考えられる。



第31図 各遺構出土遺物実測図 3

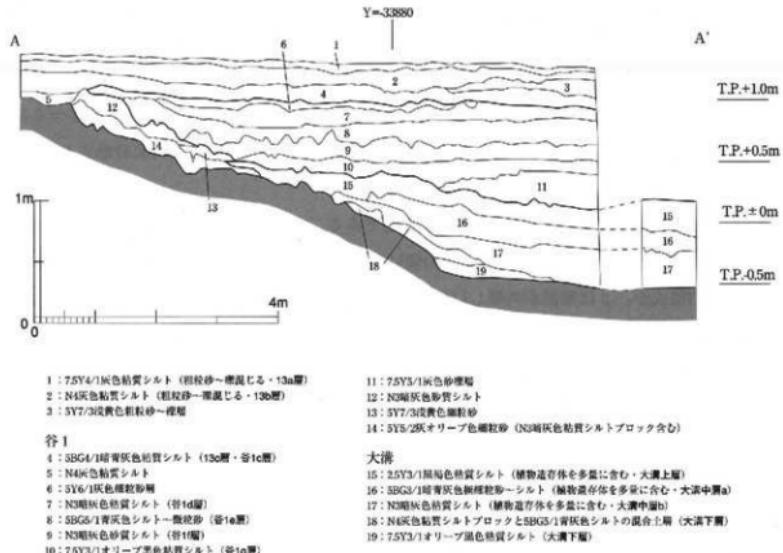
土坑684・685・686はF-1区の西半部で検出された遺構で、全体で長軸9.5m、短軸5m、深さ0.15mを測る。埋土は灰色粘質シルトを主体とする。出土遺物はなく図示できるものはない。埋土の状況から6世紀代に形成されたと考えられる。遺構内には他にピットなどは検出されず、性格は不明である。この遺構の下からも5世紀に属する遺構の検出は見られなかったため、土坑684～686付近は遺構の存在しない広場的な性格をもつスペースであった可能性もある。

#### 6) 谷1・大溝(図版17～20・22・23上段)

集落域の西側には西へ落ちる谷状の地形となっており、これを谷1とした。検出面はT.P.+1.2mである。谷1の最下部は、北北西～南南東方向に直線的に溝が掘削されていた。これはE調査区で検出された大溝090001、およびD-1区溝900、さらにはその北西に位置する下水堅坑地区(第2図)で検出された溝11と同一のもので、集落域の西端を限るものである。調査区外におよぶため溝幅は確定できていないが、E調査区北壁では幅19mになっている。

谷1の堆積層はa～h層に分けられる(第32図)。各層は暗灰～青灰色、もしくは黒褐色系のシルト～粘質シルトで、間に砂礫層を挟む。また谷2埋土とは異なり、耕作土のように下位層の小プロックをあまり含まない水性堆積層である。出土遺物から、a～e層は6世紀後半～末に属し、f・g層は6世紀前半～中頃、h層およびg層下位の砂礫層は6世紀前半に属す。

大溝の堆積層は、概ねE調査区大溝090001の堆積層と共通していることもあり、本調査区の大



第32図 谷1・大溝土層断面図

溝もそれに対応させた。堆積層は上・中・下層に分けられるが、E調査区と比べ下層の堆積とその分布範囲は一部分であった。各層の土質とその時期は、上層が黒褐色粘質シルトで5世紀後半～末、中層は2層に分けられ中層aが暗青灰色シルトで5世紀中頃、中層bは暗灰色粘質シルトで5世紀前半～中頃である。下層は第13遺構面のベースである青灰色シルトブロックを含む灰色粘質シルトで、須恵器の出土をみないがE調査区の状況から5世紀前半～中頃であると考えられる。

大溝出土遺物は須恵器、土師器、韓式系土器などの土器類、鉢、建築部材、鞍などの木製品、また鉄製品、鹿角製品、玉類や石製品など多岐にわたる。

第33～40回は大溝から出土した土器類である。大溝上層の出土須恵器は概ね5世紀後半を中心とする時期としてよいが、一部6世紀初頭～前半ものも含まれる。

第33回は大溝出土須恵器である。19を除いてすべて上層出土のものである。TK23型式ないしはTK47型式を中心とするが、型式的にみて6世紀に下るものも含まれる。1、17、18にはヘラ記号がみられる。1～10は坏蓋である。丸みを帯びた天井部と端部に短い稜を付ける。5は受部が直下せずやや外側に開くが、他と同様に口縁端部に面を形成している。11～16は高杯蓋で坏蓋と同様、天井部端部に短い稜をつける。17～28は坏身である。口縁部の立ち上がりが比較的高く、やや内傾し端部に面をつくる。坏底部は丸みを呈するものが多い。17、23、24、28は坏部の丸みがやや鈍く、受部が外上方にのびる17、23、28、横方向にのびる24がある。口縁端部内面は面をなすが、24は平坦である。これらはTK208型式に近いと考えられる。29～33はTK10型式に属すると考えられるが、これらは溝の肩部から主に出上したもので、谷1のd層やe層のものが混入した可能性がある。19は中層出土であるがTK23ないし47型式の特徴を有する。34～37は無蓋高杯である。坏部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部との境に短い稜をつくる。34、35には把手が付く。体部外面には波状文を一条めぐらす。TK23ないしTK47型式と考えられる。

第34回も大溝出土須恵器類で1～6は中層出土である。1・2は中層から出土した長頸壺で、頸部に細かい波状文を2重にめぐらし、その間に凸線を2段めぐらす。肩部はやや張る形態を呈する。TK73型式か。2は頸部が外傾し口縁端部はやや尖る。頸部中央に波状文を一条めぐらし、その上下に凸線をめぐらす。体部は最大径が中位よりやや上にとり波状文をめぐらす。TK216～TK208型式と考えられる。3は低い天井部はやや平らで口縁部は外に開き端部に面をもつ坏蓋でTK216型式と考えられる。4は低く緩い丸みを持つ天上部と受部の間に高い稜をもつ。TK73ないしTK216型式に属する。7は大溝下層出土であるがやや時期的に新しい。8は鉢で平らな底部から丸く立上がり、頸部は直立したのち口縁は短く外傾する。TK73型式か。9は瓦質の把手付鍋である。口縁は短く外反し端部は面をもつ。体部中央に沈線を施し、それを境に上半はハケ目、下半は平行タキを施す。把手は上面から切り込みを入れている。10・11は小型の鉢で上層出土。12・15は上層出土の壺である。12はやや肩が張る。体部中央に波状文をめぐら

せ、孔を穿っている。TK208型式に属する。13は中層から出土した把手付椀である。14は上層出土の鉢である。16は壺で縁の形態と類似している。体部が扁平な球形を呈する点でやや時期的に古い様相をもつ。17～19は上層出土の壺である。19は口縁端部を丸くおさめ様相が新しい。20は提瓶である。半環状把手が取り付くが欠損している。外面には平行タタキがみられるが、その上からナデを施している。カキ目は部分的に残っている程度である。

第35図は上層出土土師器である。1～7は壺である。口縁部が外傾するもの(4)、外反するもの(1・2・3・6)がある。1は直立気味に立上がったのち外反する。8は甌である。

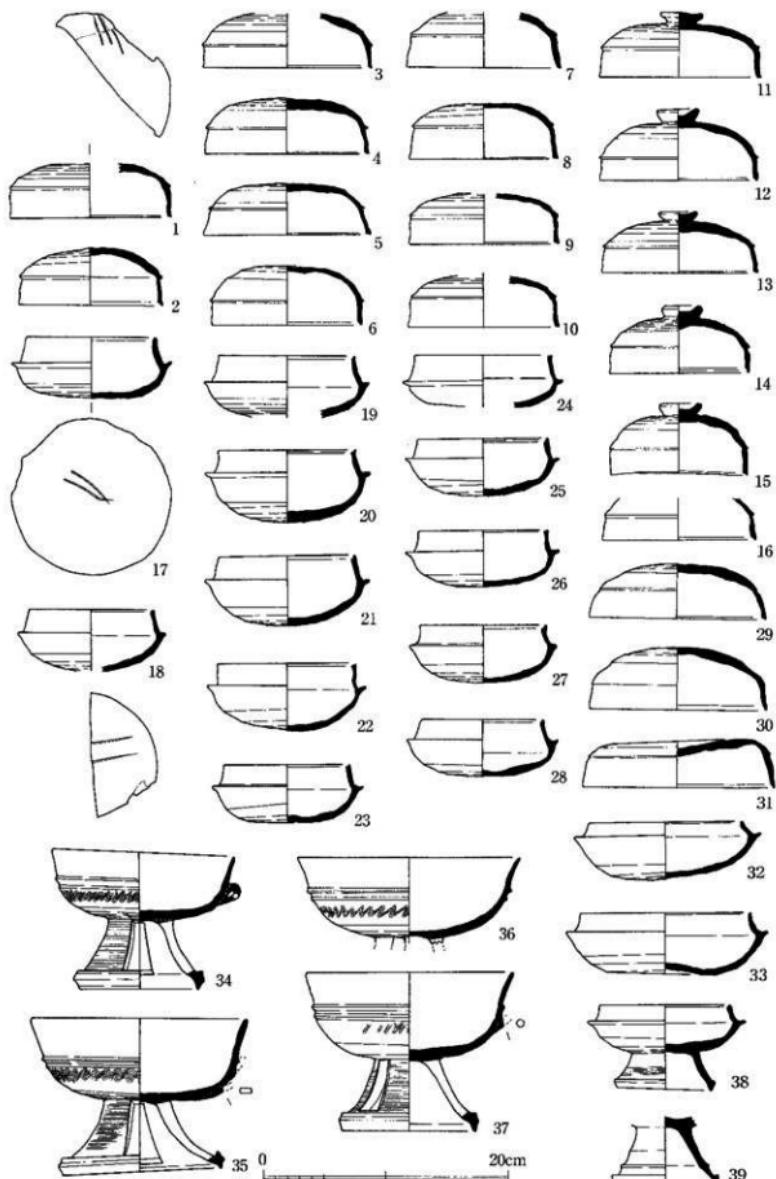
第36図は上層出土土師器である。1～7は製塙土器である。8～12はミニチュア土器である。14は須恵器壺蓋を模倣したものでTK208型式に近い形態を呈する。31～35は韓式系土器である。

第37図も中層から出土した土師器である。布留系の壺を中心とするが、4のように口縁部を直立させたものや、5・7のように外傾させるもの、8のように外反させるものがある。9は直立気味に立上がりたあと外傾する口縁をもち、底部を作り出している。関東を中心とする東日本の特徴であろうか。体部外面も他と異なり荒いハケメで調整されている。10は長胴甌である。

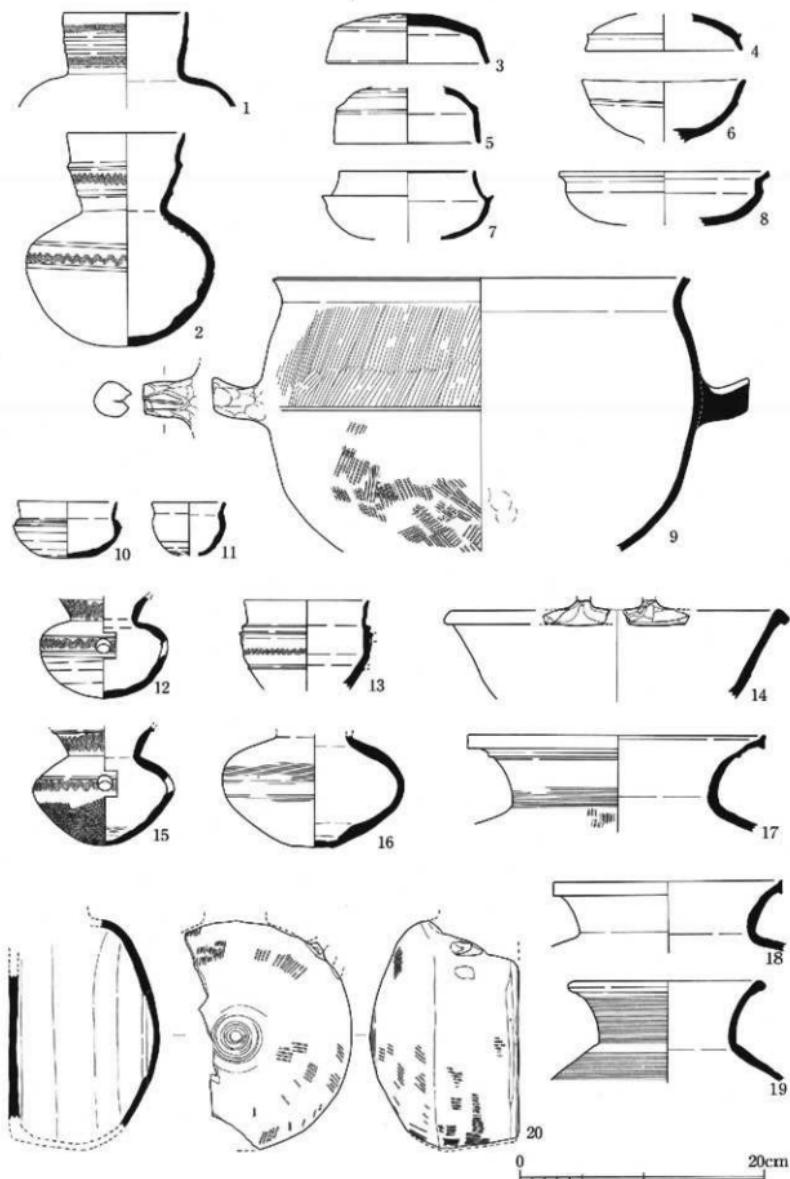
第38図はすべて中層から出土した土師器である。1・2は小型丸底壺で2には横方向のミガキが施される。3～5は製塙土器である。6～8は小型甌である。9・10の甌は外傾する口縁部をもち体部が口径より大きくならない形態を呈する。12・13は直口甌で12の頸部には縱方向のヘラケズリがみられる。14～20は壺である。外形する口縁部をもつもの(14・18・19)は口縁内面に横方向のハケ目を施す。口縁部が内湾する15・16・17は口縁内面がヨコナデで調整されている。22・23は二重口縁甌である。22は中層最下層からの出土である。20は後円部が外反し端部を肥厚させている。

第39図は中層出土土師器である。1・2は鉢、3～8は椀である。9～33は高杯である。有稜高杯(9～23・33)は、稜の上部が直線的に開くもの、外反するもの内湾するもの、内湾したのち外傾するものなどがみられる。また稜は断面がしっかりした三角形を呈するものや緩い三角形を呈するものがみられ、さらに調整では壺部外面をハラミガキするもの、ハケメを施すもの、ヨコナデを施すものなどがみられる。24～32は椀形高杯である。壺部外面はハケメ、内面がハラミガキのものが多いが、外面にヘラケズリやナデを施すものもみられる。脚部は屈折するものが多いが、23のように外反するものもみられる。33は脚部との接合部の分かる資料であり、須恵器高杯と同様の接合方法を用いていることが分かる。

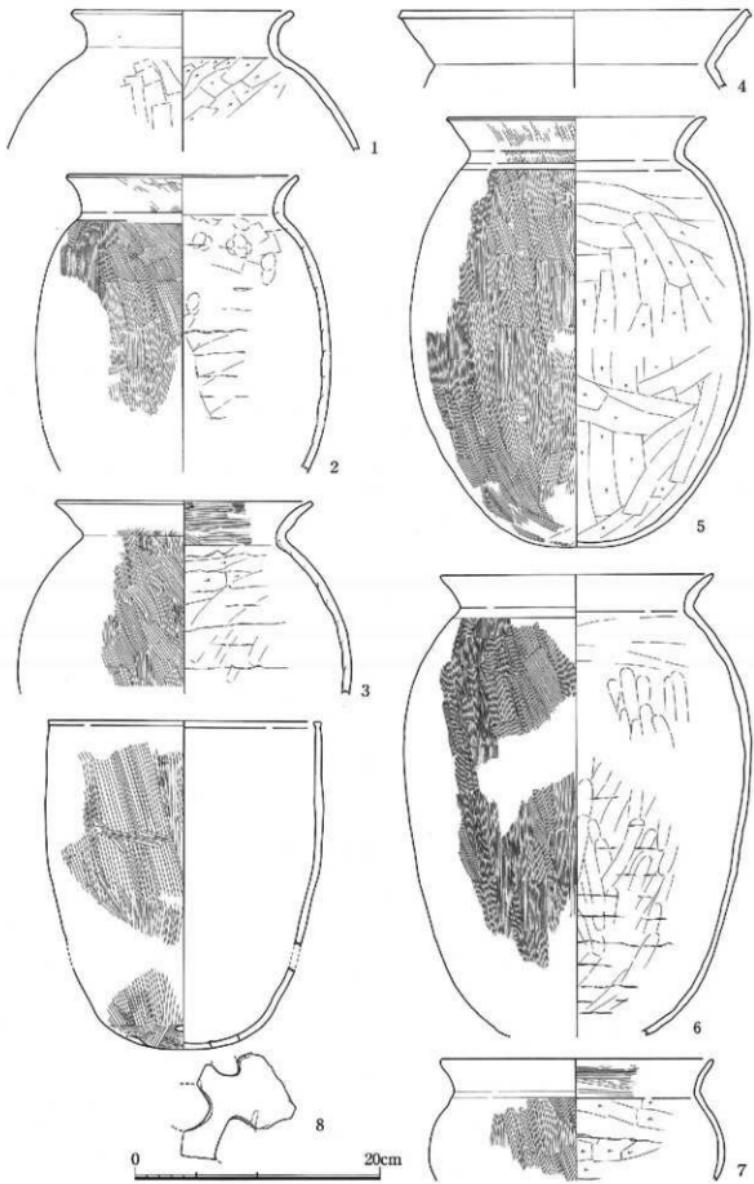
第40図は中層出土韓式系土器である。1～7は黒色研磨土器である。1・2・4は高杯の壺部、4は脚部、5・7は壺口縁部である。6は高杯脚部か。3は脚部との接合面が分かる資料である。刺突を円弧上に施している。8～15は平底鉢で、平行タタキ目をもつもの(8～12)、格子目タタキをもつもの(14)がある。13は外面調整がナデである。16～18は甌で、18は底部が欠損するものの形態がわかる資料である。口縁端部は沈線を施し、頸部は縱方向のハケメ、体部は格子タタキを施している体部下半では格子の角度が不揃いになる。体部内面はヨコハケ後に工具によるナデ



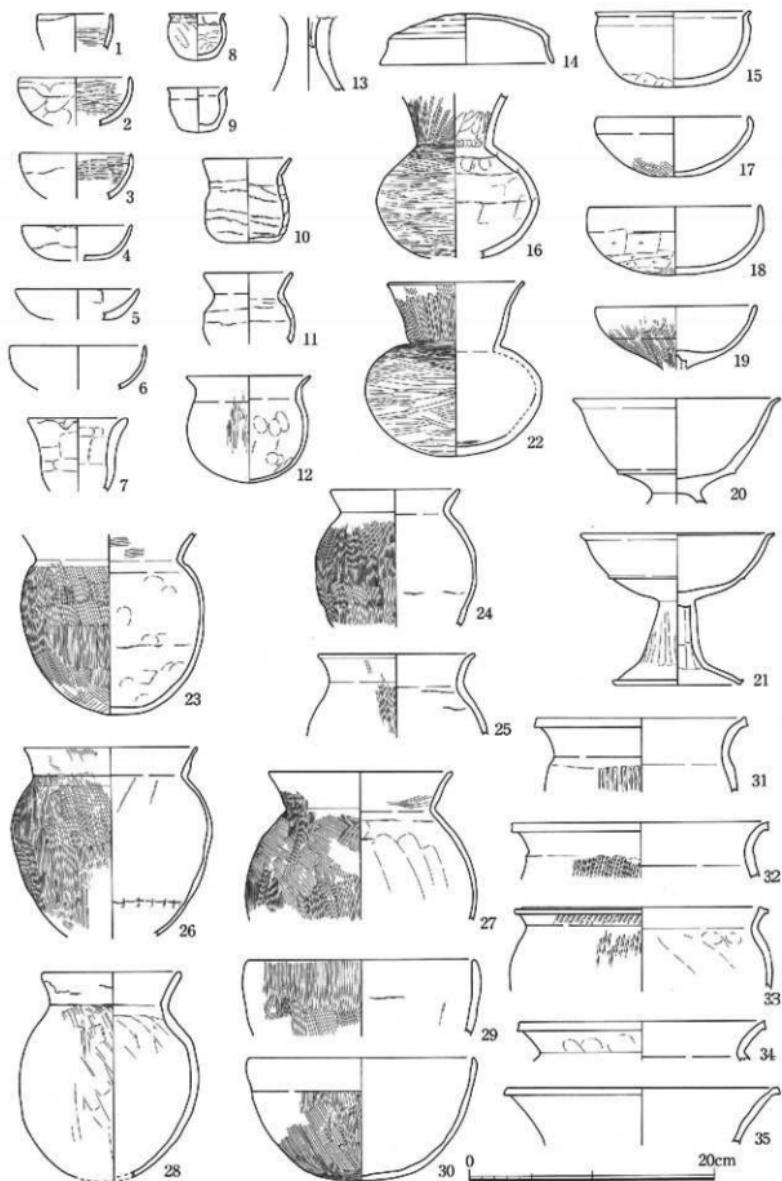
第33図 大溝出土土器実測図1



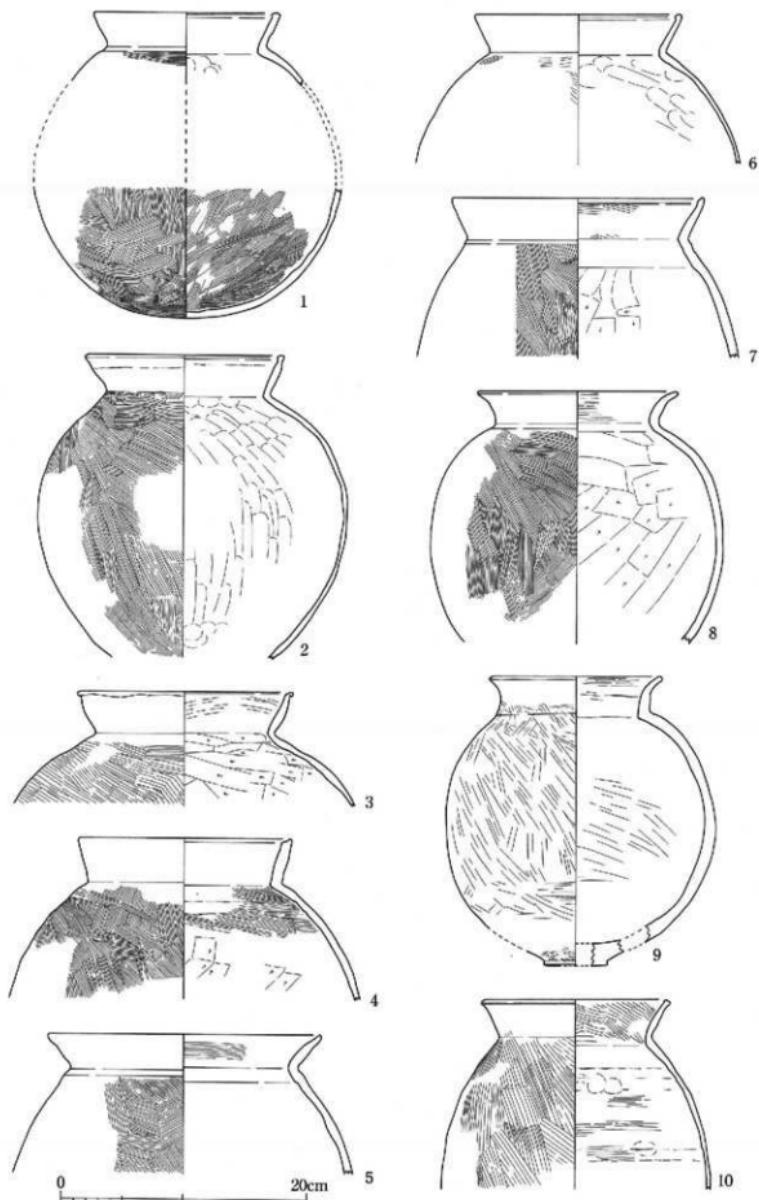
第34図 大溝出土土器実測図 2



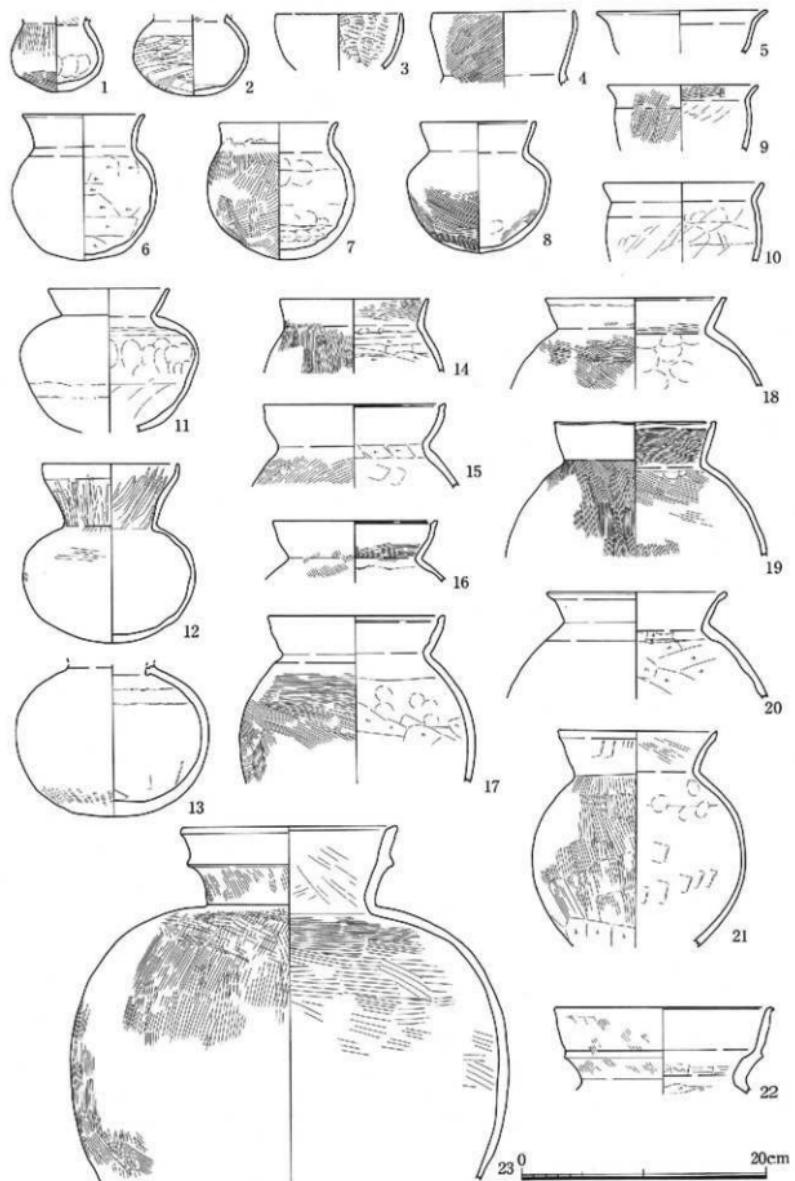
第35図 大溝出土土器実測図 3



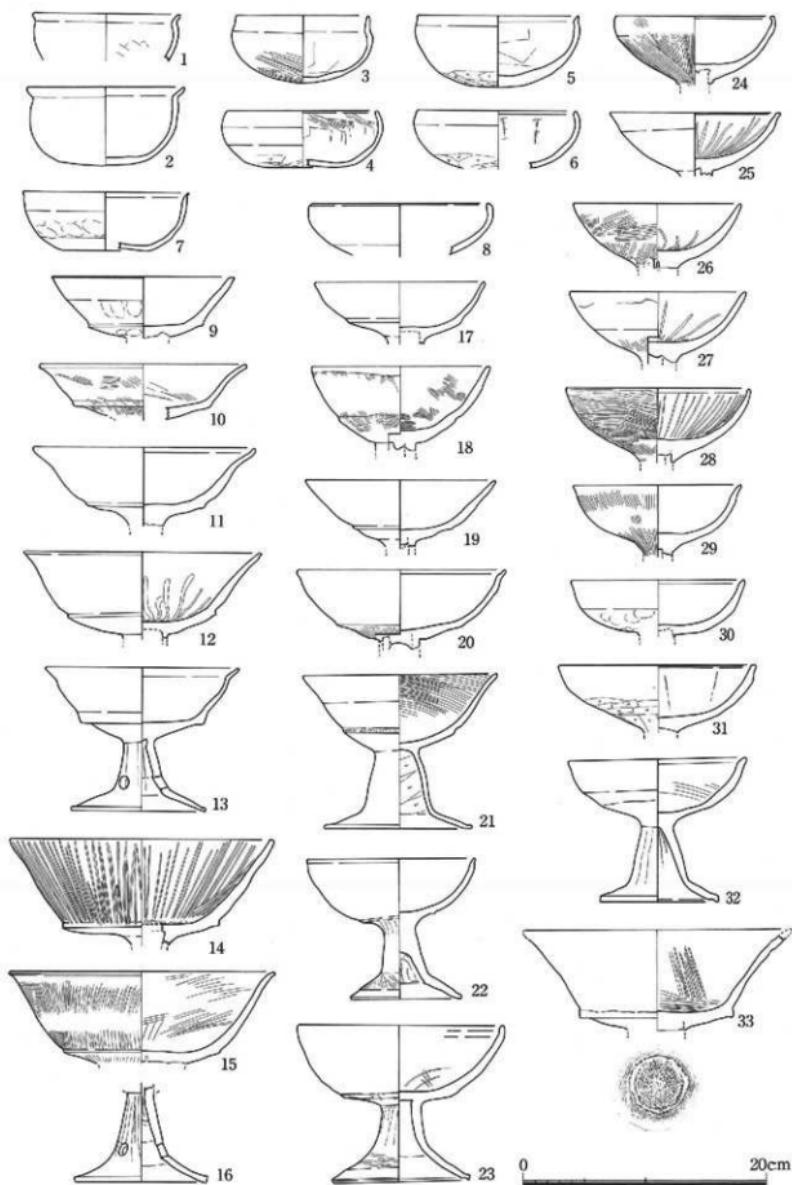
第36図 大溝出土土器実測図 4



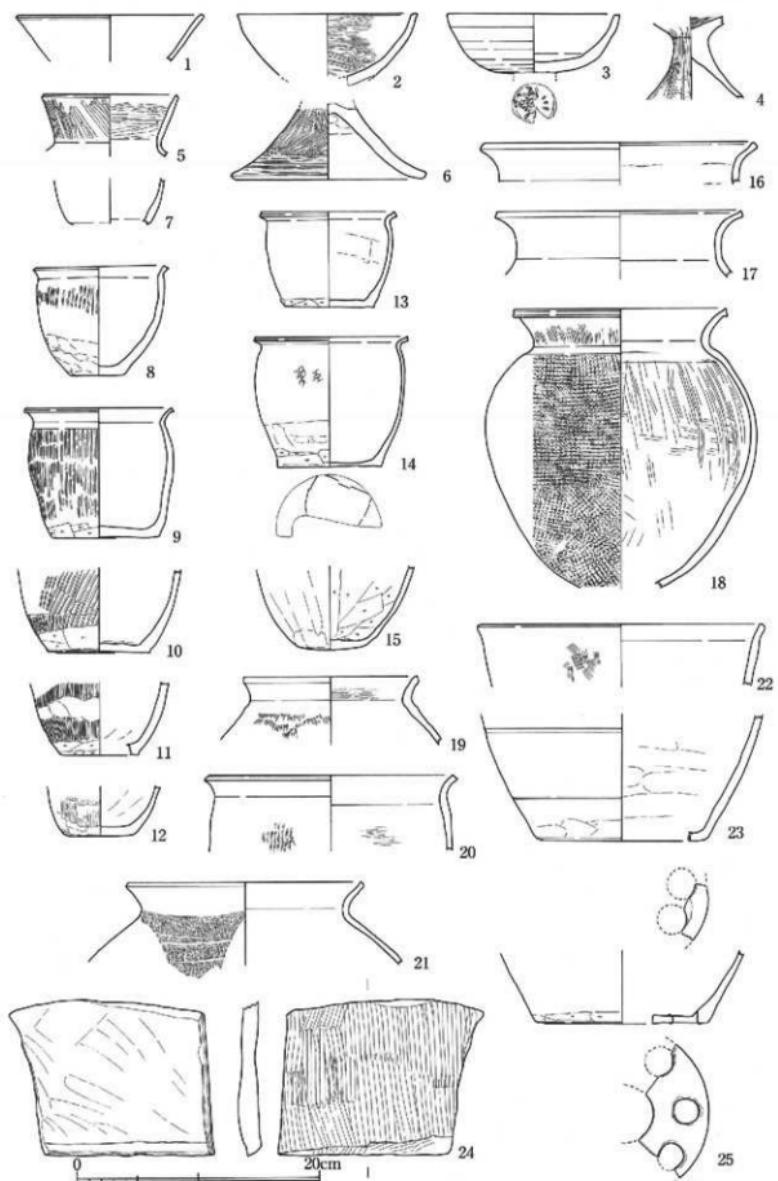
第37図 大溝出土土器実測図 5



第38図 大溝出土土器実測図 6



第39図 大溝出土土器実測図 7



第40図 大溝出土土器実測図 8

を施している。22・23・25は甌。21は壺の口縁部でタタキ目の上から数条の沈線を施している。

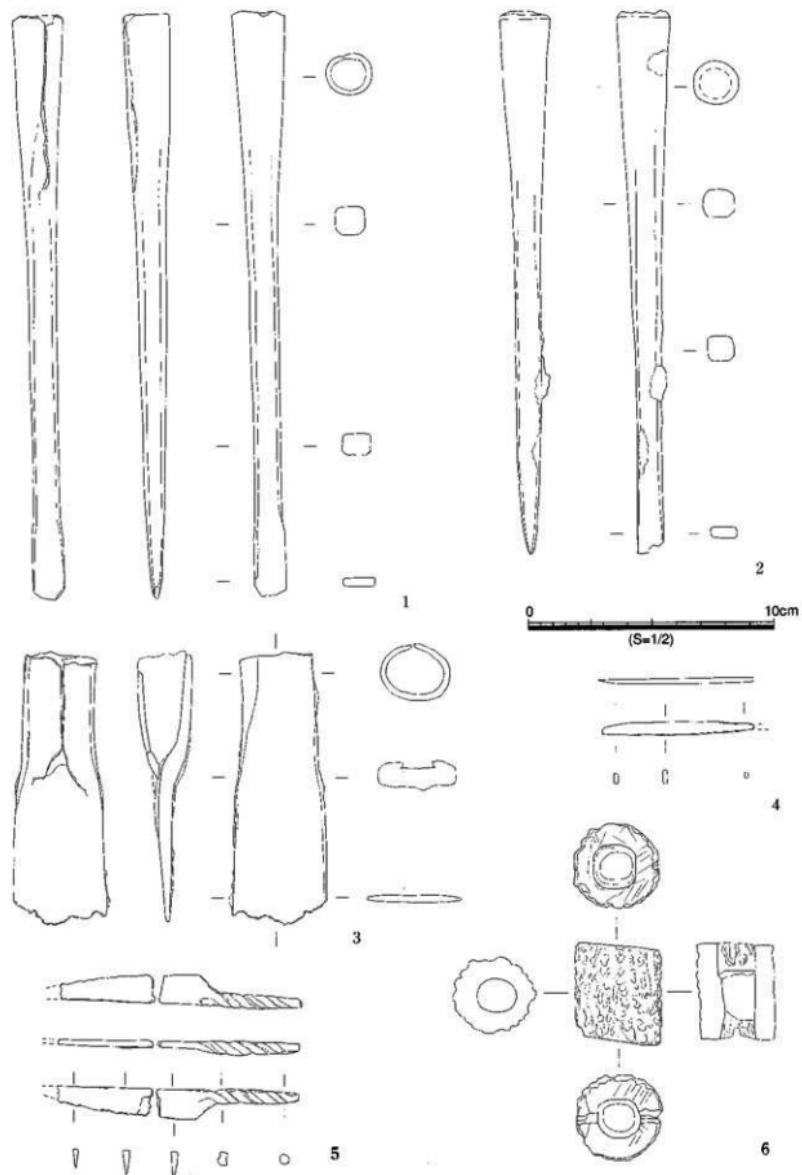
石器・石製品・玉類では、滑石製管玉、碧玉製勾玉、滑石製有孔円盤、白玉など多数出土しているが、詳細は本報告にゆだねたい。

第41図は鉄器類である。土器や木器に比べ数少ない。大溝からは鉄鑿、刀子、小型刀子が出士している。これらはいずれも中層出土であり5世紀中頃に属する。鉄鑿（同図2）は長さ22.5cm、刃幅2.3cmを測る。頭部に木質を残す。刀子（同図5）は茎の部分が背に対して左巻きに捩られている。長さ10cm、刃幅1.2cm、茎幅0.6cmを測る。茎部分の針金を二又にして捩っているものとみられる。小型刀子（同図4）は長さ6.2cm、刃幅0.6cmで両刃である。小物の細工などに用いられたのであろう。他に1はF-1区第13a層出土の鑿で、6世紀後半に属する。長さ23.7cm、刃幅1.9cm。3はF-2区の第14層中から出土した斧で、堅穴住居跡8の検出中に出土した。この住居跡に伴っていた可能性は否定できない。長さ11cm、幅3.8cm、基部厚2.2cm。

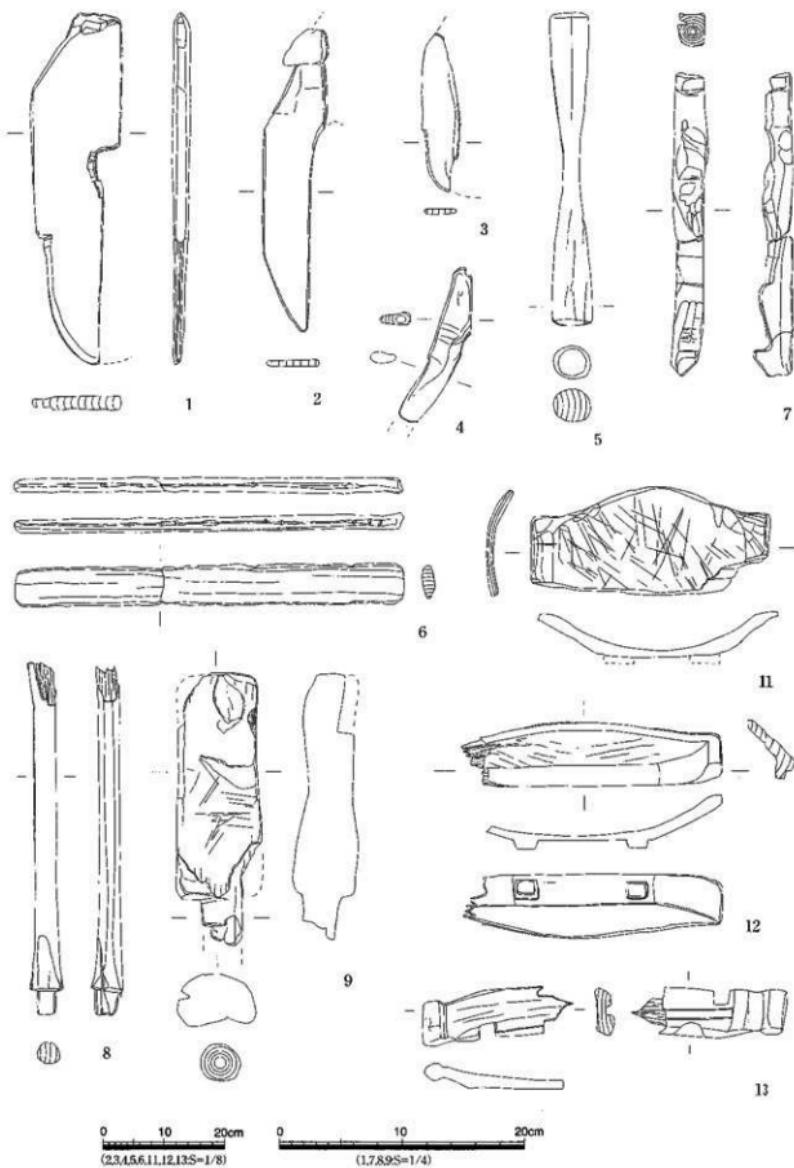
第41図6は鹿角製の刀装具である。外面に部分的に朱が残存しており、紐通し孔のような小孔があけられている。また上下面からあけられた方形孔の内面には漆のような塗料が残存している。下面には中央部に溝を通し一方に切りこみを入れている。この特徴は第43図18と類似する。全長3.4cm、径3.2cmを測る。

第42・43図は木器類である。農工具、武具、船材などの運搬具、祭祀具などがある。いずれも5世紀中頃～後半に属する。主なものを略述する。

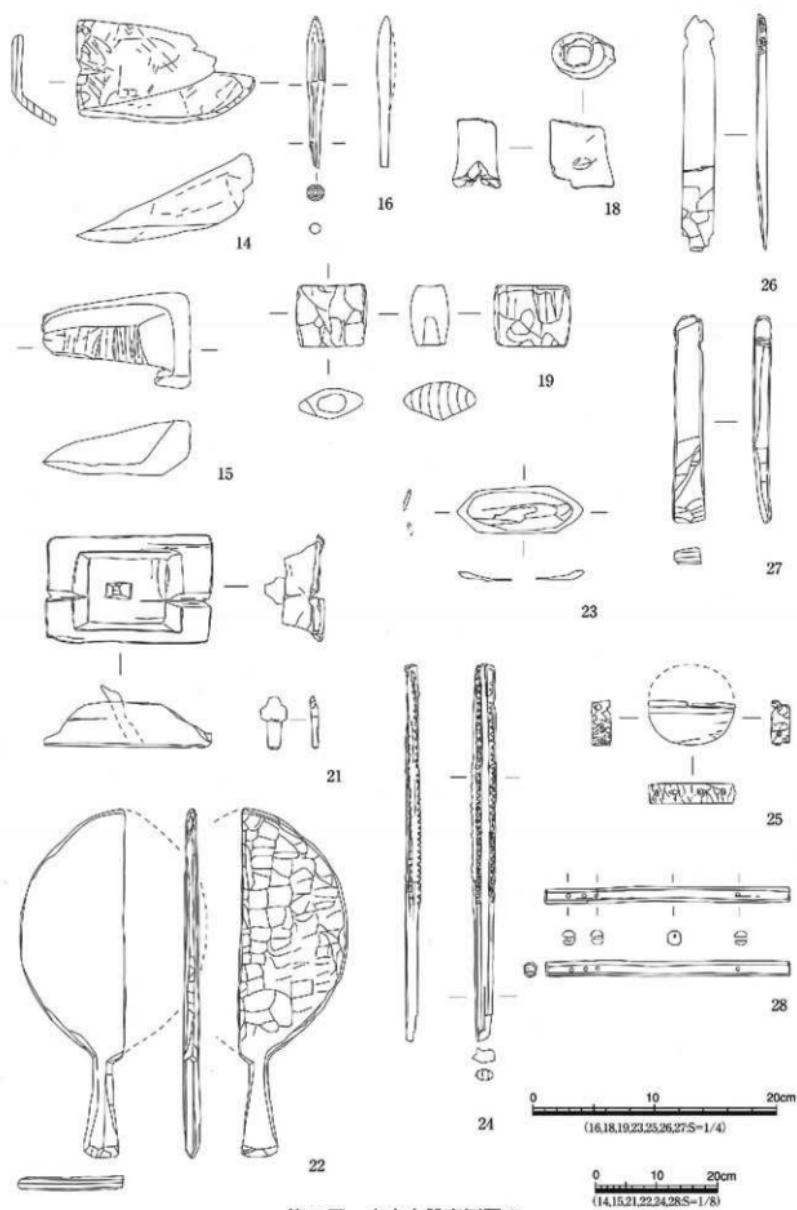
1・3は曲柄鍬である。1には方形孔が穿たれ転用されている。1は長さ28.8cm、幅7.4cm、厚さ1.3cm。3は残存長25.3cm、幅6.4cm、厚さ0.8cm。4は反柄の緊縛部～軸部である。残存長25.7cmを測る。5は堅杵である。搗部は両端とも平坦である。全長51.0cm、搗部幅6.5cm、厚さ5.3cm。6は目盛板である。上端、下端に刻目を入れているが磨耗が激しく間隔が不明瞭である。部分的に2.4cm間隔で刻目が残存している。全長64.1cm、幅6.7cm、厚さ2.3cm。7は背負子と考えられる。上端部が欠損している。下端部には抉りが入れられ、その上方には段が削り出されている。全長24.9cm、幅2.8cm、厚さ2.5cm。8は紡織具のうち杼の支え木である。腕木に差し込む部分を長方形に作り出している。一方の端部は欠損している。全長29.0cm、幅2.6cm、厚さ1.8cm。9は横樋である。円筒状の身部の上下面中央部は打撃によって窪んでおり、工具の頭部によるものとみられる線状の痕跡がみられる。農具というよりは木工の際に工具を打ちつけるのに使用されたものであろう。残存長22.5cm、幅6.0cm、厚5.1cm。11は柵で耳坏形容器などとよばれるものである。四脚を作り出すが欠損している。柵円形の長軸端が長方形に整形されている。内面には刃物痕とみられる直線状の工具痕が多数みられる。全長40.0cm、幅17.6cm、厚さ2.0cm。12も柵である。11と同様に四脚を作り出すが、平面形が長方形の長辺をレンズ状に膨らませたような形態を呈し、長軸上端部が長方形に整形されている。残存長42.7cm、幅10.4cm、厚さ2.2cm。13は椅子である。脚部は別材で作られる、組合せ式の椅子座板である。端部は座面に対し斜め上方に緩く立ち上がり、断面凸形に削り出している。下面是長軸方向に幅1.6cmの溝を設



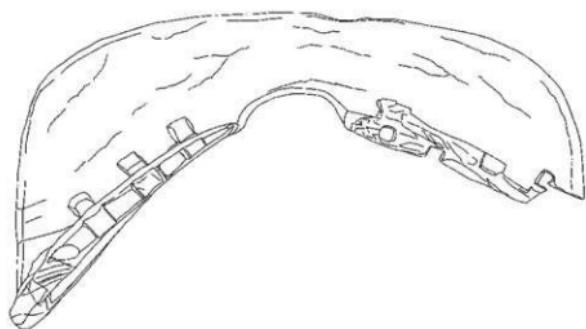
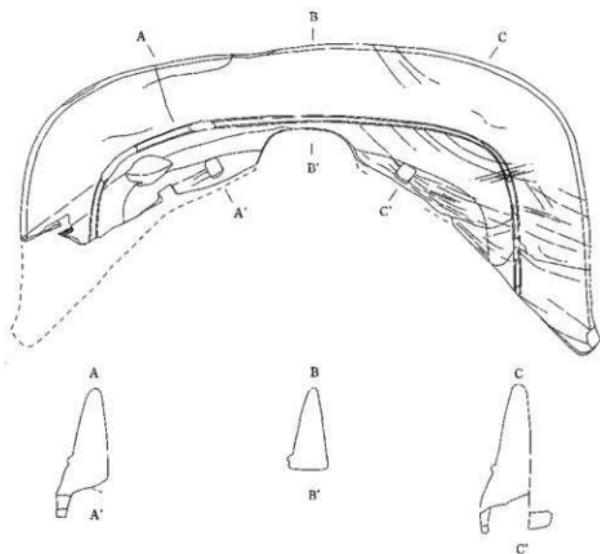
第41図 出土鉄器・鹿角製品実測図



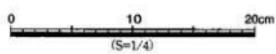
第42図 出土木器実測図 1



第43図 出土木器実測図 2



20



第44図 木製鞍座測図

け前面もしくは後面に向けて板状の脚を取り付けたと考えられる。また表面を貫通するように一辺2cm程度の方形孔が穿たれており、側面に設ける脚に設けた出納と組合せたものと考えられる。残存長24.0cm、残存幅9.7cm、厚さ2.8cm。第43図14・15はアカトリである。船底に溜まった水を掻き出す道具と考えられ、いずれもチリトリのように先端部断面を尖らせている。また基部には把手が削り出されていたが欠損している。14は全長29.6cm、幅15.8cm、厚さ2.3cm。15は全長21.9cm、幅15.5cm、厚さ5.3cm。16は鎌形木製品である。断面を丸く仕上げており稜はみられない。全長12.3cm。17(図版27-17)は弓である。弓頭部分は外面から削り込み凸状に作り出す。残存長87.0cm、幅3.0cm、厚さ2.8cm。18は束頭である。表面は加工痕が不明瞭で磨耗している。下端部の一方に段を作り出し、その側面には切りこみを入れている。上面からは方形孔が穿たれている。全長5.6cm、幅4.9cm、厚さ3.1cm。19は鞘尻である。鞘はD調査区の大溝から出土しており、その端部を凸状に作り出している部分が、本例の上面にあけられた楕円形孔と対応すると考えられる。表面はやや粗めの加工痕がみられる。全長5.0cm、幅6.3cm、厚さ3.2cm。21は台形木製品である。上面の方形孔中に十字架状の板材がはめ込まれていた。台部全長27.3cm、幅17.4cm、厚さ7.0cm。十字架状の板材は全長8.6cm。22はさしば形木製品である。やや厚手(2.0cm)の板材の加工途上のもので、片面には粗い加工痕が明瞭にのこる。全長57.0cm、幅17.7cm。23は船形木製品である。全長10.4cm、幅3.7cm、厚さ0.6cm。24はさら状木製品である。上面の左右2辺および下面の1辺に刻目を施している。全長61.9cm、幅4.0cm、厚さ2.4cm。25は用途不明品である。半分欠損しているが、径4.1cm、厚さ1.6cmの円形板の中央に円形孔を貫通させ、上面には断面V字の溝が彫られている。側面には円形小孔を穿ちそこに木釘状の木材が埋め込まれていた。側面には加工痕が明瞭に残されている。26・27も用途不明品である。頭部を作り出すように両側面から切り込みを入れている。26は全長19.3cm、幅2.6cm、厚さ0.7cm。27は全長18.0cm、幅2.6cm、厚さ1.4cm。28は棒状の木製品で、断面を8角形に削り出している。一方に小孔を3箇所穿ち、その中に木釘状の木材が埋め込まれていた。全長45.0cm、幅2.5cm、厚さ2.1cm。

第44図20は木製鞍である。後輪と考えられ大溝の中層aから出土した。5世紀中頃に属する。遺存状態が非常によく内外面とも黒漆が塗布されている。外面の漆の方が光沢がより鮮明で、内面の漆は使用に際して擦れたのか、やや光沢に乏しく所々漆塗膜が剥がれている。現存幅46.5cm、高さ27cm、最大厚4.5cmで、トチノキの枝別れ部分や根元などのような湾曲部分を利用して作られている。木取りは粧目である。

鞍の上端はやや丸みをおびた方形となっており、鞍外面右側の馬狹部は末広がりになり、端部まで残存する。右側の馬狹部および左右の磯の下端は欠損している。磯は膨らむように加工されており、磯と海と境には幅0.7cmの凸帯を削り出している。また磯の最も高まった部分はやや平坦に加工されており、州浜形を挟んで一辺約1cm方形孔が左には2箇所、右に1箇所穿たれている。これについては軸通し孔の可能性がある。

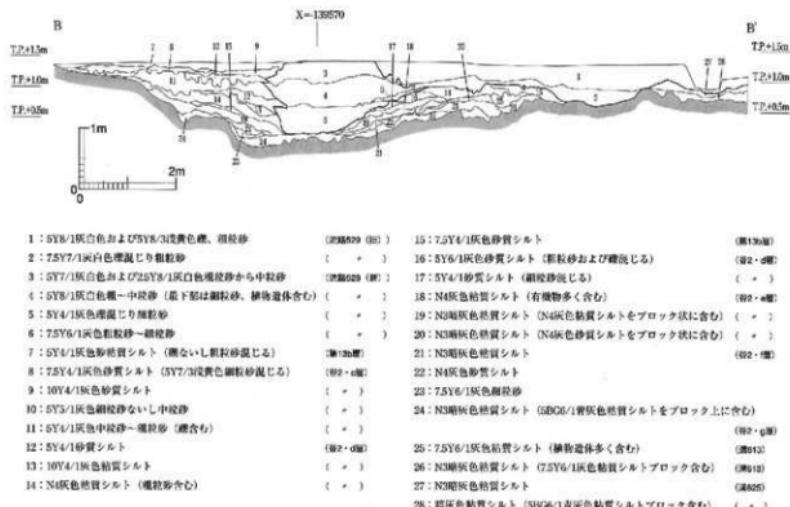
一方、鞍の内面には右側では欠損しているが、左側に高さ1.5cmの段が作り出され、幅1.5cm程度の深い溝が4箇所彫られている。またこの段の奥に、鞍の材内部を下から抉るように断面「コ」字形の溝（幅約3cm、奥行き約2.5cm）が穿たれている。さらに段と鞍内面の接する部分からこの溝に向かって斜め下方向に一辺約1.5cm程度の方形孔が4箇所あけられている。これらは段上の深い溝と対応しており、段の下にあてがった居木を革紐などで固定する役割をもっていたと考えられる。

大阪府内における古墳時代の鞍出土例は、八尾市八尾南遺跡、豊中市上津島遺跡、堺市百舌鳥陵南遺跡、寝屋川市讀良郡条里遺跡（2点）、茨木市玉櫛遺跡などが知られている。このうち百舌鳥陵南遺跡例や上津島遺跡例は本例と類似する構造をもつが、それらは鞍内面の段に直接穿孔している点と鞍下面から溝を穿たない点で本例とは異なっている。他例とも合わせ、居木装着の構造等については本報告で検討したい。

## 7) 谷2・流路529

集落域の北側にある深い谷2は、D-2区中央で検出された谷部の南側の延長部分である。集落形成以前から微高地に対して低く、谷1がF区集落の微高地を巻くように谷2部分に食いこんでいたこともあるて西へと徐々に低くなっている。この西に下がる谷1の食い込みに向かって6世紀後半に流路529が流れ始め、この流路の土砂の堆積作用によって谷2は埋没していく。

谷2の堆積層は6層に分けられる。a層～e層は間に砂礫を挟む粘土～粘質シルトで、基本的



第45図 谷2・流路529土層断面図

に下位層の小ブロックや砂礫を部分的に含む耕作土である。特にd層上面では鍬による耕作痕を、またe層上面では畦畔を検出しており、集落間の小面積の低地部分で水田耕作を行っていたことが判明した。f層は均質な粘質シルト～粘土の水性堆積層で、出土遺物からは、このa～f層が6世紀後半～末に堆積したものである。一方g層は5世紀の包含層である14層に対応する層で、この時期は流路529が流れていないこともあり、谷の堆積速度は緩慢で、浅い谷とはいえ、それほど水気は多くなく、井戸627や上坑626などの遺構が形成されたが、遺構の存在しない部分も面的に目立つ。またトレチ4の東側には谷2がさらに1段落ち込むように、北への斜面がある。この斜面は流路529に関係なく5世紀段階からあったもので、ここからトレチ4の西側までの範囲は、後述の大溝上層の埋土によく似た黒褐色の粘質シルトがf層の下位に堆積し、5世紀後半の遺物を含む。

流路529は6世紀中頃～後半に北東方面から流れてきた流路で、D-2区検出の自然流路470、またC調査区の流路4353の延長部分である。もともと谷1が、集落を形成する微高地を取り巻くように北へ入り込んでいたように、相対的に低い入り込み部分へ向かって、北東方向から流れ込んできた自然流路で、最下層の粗粒砂層から検出された須恵器などにより6世紀後半には形成され、その後幾度となく氾濫しながら谷2を埋没させている。

出土遺物はTK10型式期段階の須恵器を中心で、他に土師器甕、壺などがある。詳細は本報告書で報告したい。

## 第3章　まとめ

### 第1節　蒲屋北遺跡F調査区の古墳時代遺構面について

今回のF調査区の発掘調査でも古墳時代中・後期の集落跡を検出した。この集落跡は調査区中央部から南東部にかけて存在する、弥生時代後期～古墳時代前期に形成された自然堤防上に形成されている。ただこの高まりの北側・南側はそれぞれ谷状地形になっているため、この微高地は独立した島のように存在していたと考えられる。その意味で他とは別の集落域として織めることも可能である。

本調査区において、集落の形成が確認できるのは、堅穴住居跡9や堅穴住居跡10の構築された古墳時代中期中頃である。この時期の他の遺構はあまり顕著でないが、南東部で検出された井戸944は遺構の重複関係から5世紀中頃まで遡る可能性が高い。この時期はそれ程遺構の密度も多くないものと考えられる。ただし大溝中層最下部～下層からは5世紀前半の遺物もみられるので、集落の形成自体は他調査区と同様この時期から始まっているとみるべきであろう。なお、調査区北西端の溝625・856は5世紀中頃の溝であるが、これはD調査区で検出された集落域の南端を区切る溝である。

古墳時代中期後半には、集落の密度も濃くなる。堅穴住居跡7・8・12・14・16、掘立柱建物跡5・6、井戸627・1168、溝633・724・1062・1075などが当該期に属する。他調査区と同様にこの時期が集落の最盛期であるとみてよい。

6世紀前半～中頃に属する遺構は数少なく、堅穴住居跡はほとんどみられなくなり、全体的に集落規模が縮小したと考えられる。大溝内からも6世紀前半に属する遺物は、その前後の時期に比べ少なく、集落規模の縮小傾向は遺物量にも反映しているものとみられる。

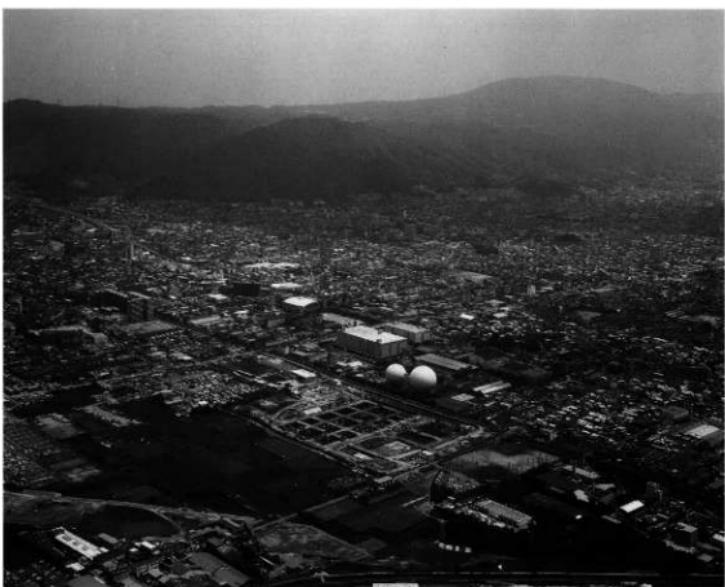
6世紀中頃～後半の遺構では、堅穴住居跡3・4・5・11・13、掘立柱建物跡1～4・7～10、井戸690・855、溝621・856・1062（上層）がみられる。掘立柱建物跡は時期の判別が困難であり、一部6世紀末まで新しくなるものも含まれる可能性がある。この時期は堅穴住居規模が5世紀代のものに比べ大きくなり、同一箇所でカマドの主軸方位を90°振りながら建て替える例（古い順に堅穴住居跡4→5→3→2）もみられた。また堅穴住居跡11のように長方形を呈するもの、堅穴住居跡13のように規模の大きなものがみられる。またこの時期に調査区北部で流路529が形成され始め、その氾濫堆植物を利用して谷2で小規模な水田耕作を行っていたことも判明した。一方大溝も埋没し谷状の地形になっていた（谷1）。その後6世紀末になると、堅穴住居跡1・2がみられる程度となり、集落規模は縮小化する。この時期には谷1、谷2とともに埋没し微高地との比高差が解消される。その後は古代～中世まで水田畦畔が検出される生産域となり、集落はこの場所には営まれなくなる。

本調査区の集落域は以上のように変遷し、5世紀後半と6世紀中～後半に規模の拡大期として捉えられる時期があることが判明した。從来より藤原北遺跡の集落変遷は、どの時期も連続的に集落が営まれていることが指摘されていたが、本調査区については上記2時期に盛期を向かえている点で他とはやや異なる。また6世紀代に掘立柱建物跡が集落要素の中心となるC調査区を中心とする本遺跡北西部に比し、堅穴住居跡が要素の中心となる本調査区およびD調査区の西半部では、集落のあり方に差異があることも予測される。今後詳細に分析を行い、微高地の各集落域の内容を比較することで、本遺跡の価値付けを行いたい。

また上記の集落変遷のほかに、調査成果として注目されるのが大溝から出土した木製鞍（後輪）である。本遺跡では過去に、この大溝と同一溝より輪鏗（下水堅坑地区）と鍔轡（E調査区）が出土しており、この鞍の出土により主要な馬具が三点揃ったことになる。

本遺跡周辺に展開したであろう牧の馬の馬装としては、四條畷市南山下遺跡で出土している馬形埴輪が従来より知られている。この埴輪馬には輪鏗、鍔轡、鞍が表現されており、鞍は本遺跡例と同じ意匠であることが注目される。この埴輪馬のすんぐりした体形は、△調査区で検出された馬の全身骨格から復元された「在来馬でいう御崎馬の小さいクラス程度の体格」（大阪府教育委員会2004「藤原北遺跡発掘調査概要Ⅳ」）を見事に表現している。本遺跡出土の馬全身骨格と馬具（輪鏗、鍔轡、鞍）は、この南山下遺跡の馬形埴輪と合わせ、牧の馬の姿を具体的にイメージさせてくれる第一級の資料ということができるであろう。

図 版



庵屋北遺跡遠景（北西より）



調査区全景（東より）



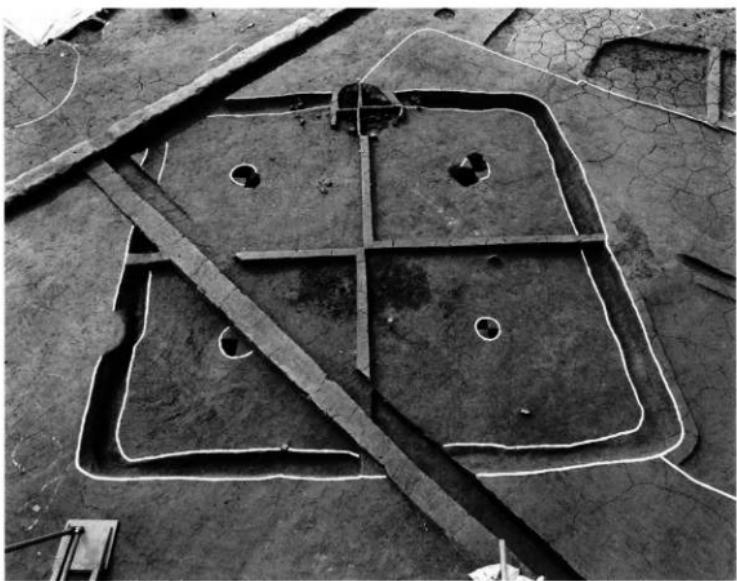
調査区全景（真上より）



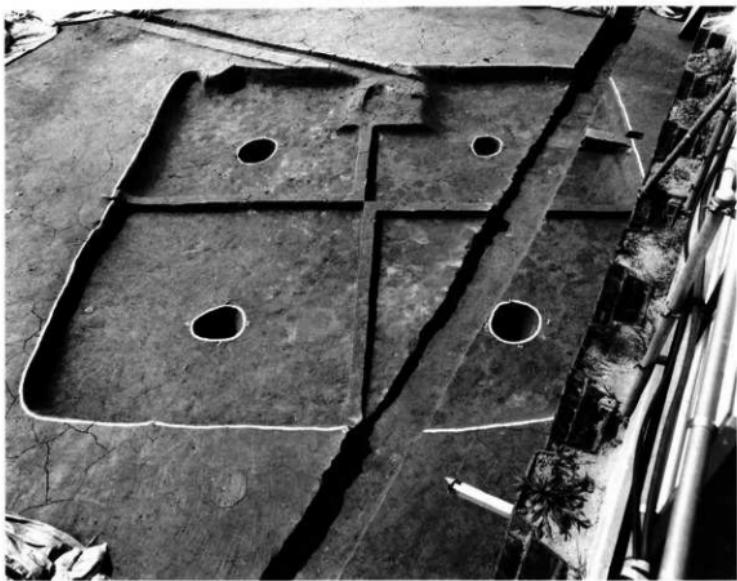
第13遺構面（西より）



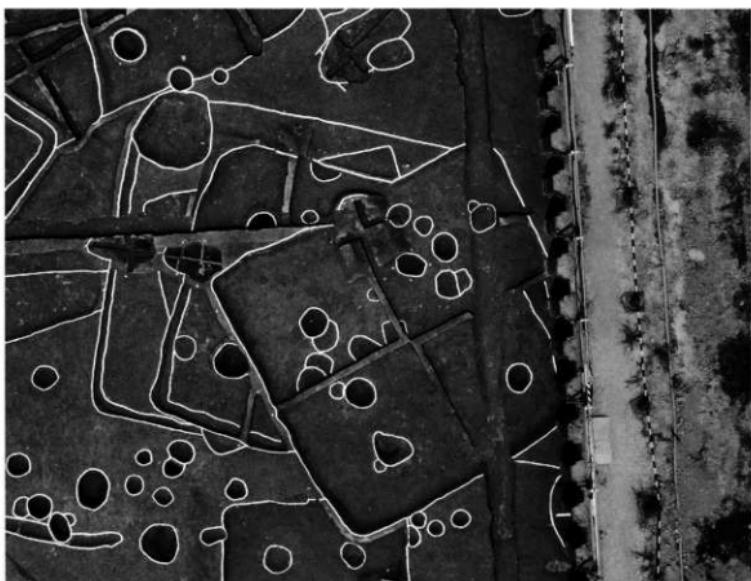
集落域の検出状況（東より）



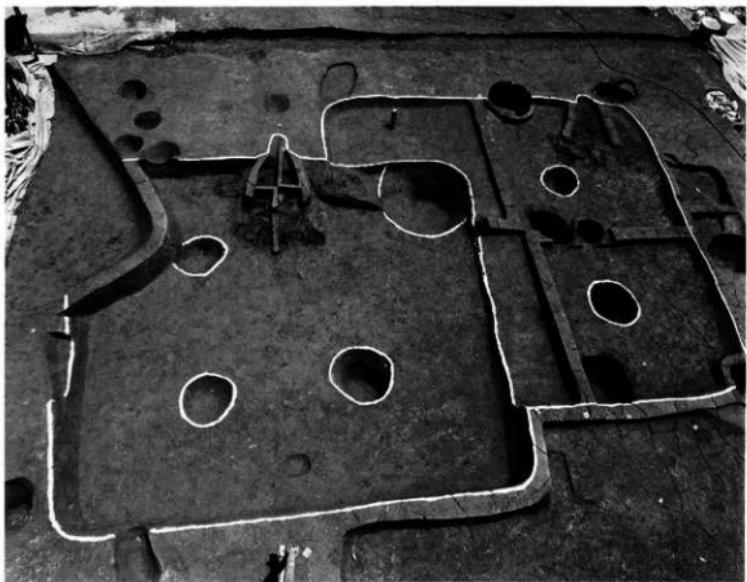
竪穴住居跡 1 (南東より)



竪穴住居跡 2 (南東より)



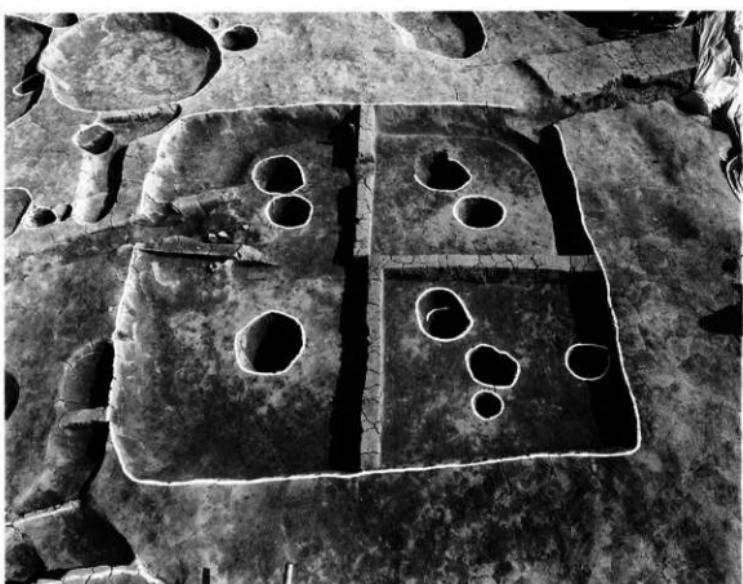
竪穴住居跡 2・3・4・5



竪穴住居跡 7・12（西より）



竖穴住居跡 8・19 (北より)



竖穴住居跡 9 (北より)



竪穴住居跡 1 カマド  
検出状況（南より）



竪穴住居跡 1 床面中央部の炭化物層  
検出状況（南より）



竪穴住居跡 1 床面土器  
検出状況（南より）



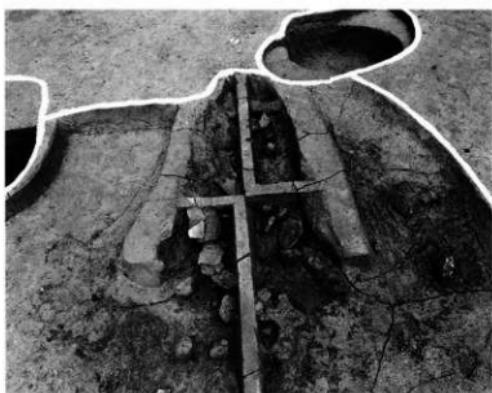
竪穴住居跡 2 カマド  
完掘状況（南より）



竪穴住居跡 3 カマド  
完掘状況（南東より）



竪穴住居跡 4 カマド  
検出状況（南東より）



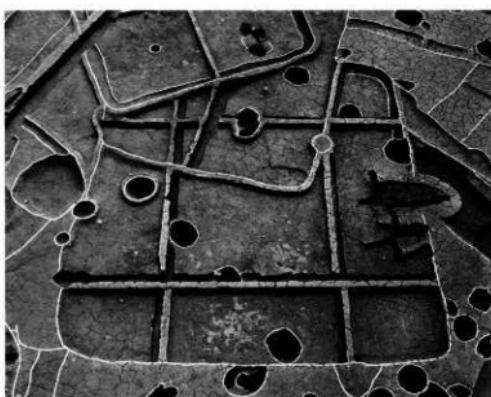
竪穴住居跡7カマド  
検出状況（西より）



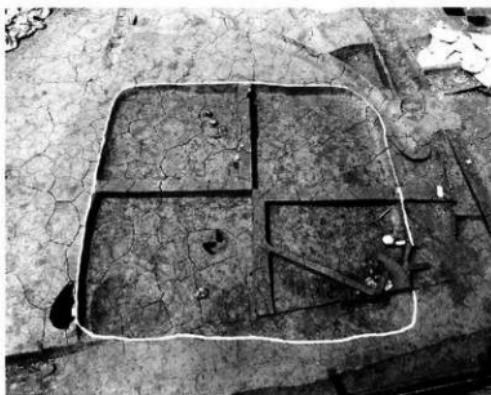
竪穴住居跡12カマド  
検出状況（西より）



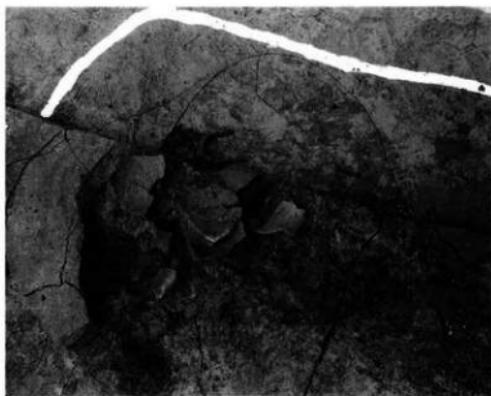
竪穴住居跡12床面  
製塙土器検出状況



竪穴住居跡13（北東より）



竪穴住居跡10（南より）



竪穴住居跡10カマド  
検出状況（北より）



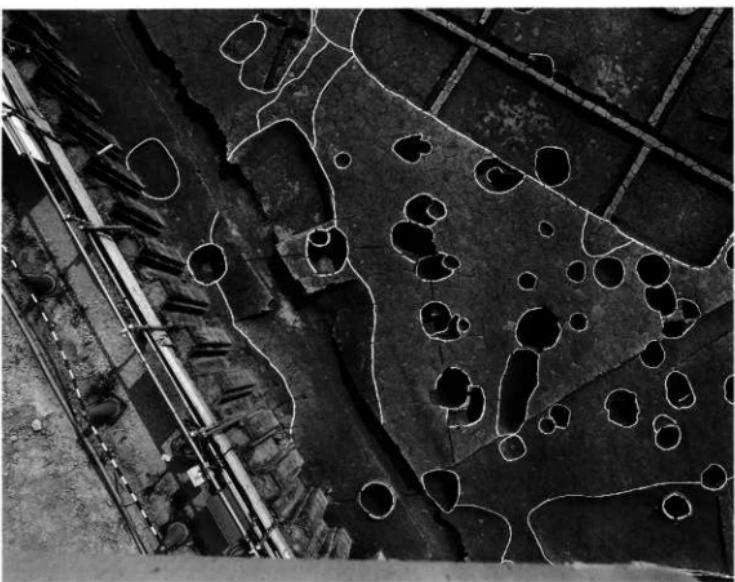
豊穴住居跡16  
(南より)



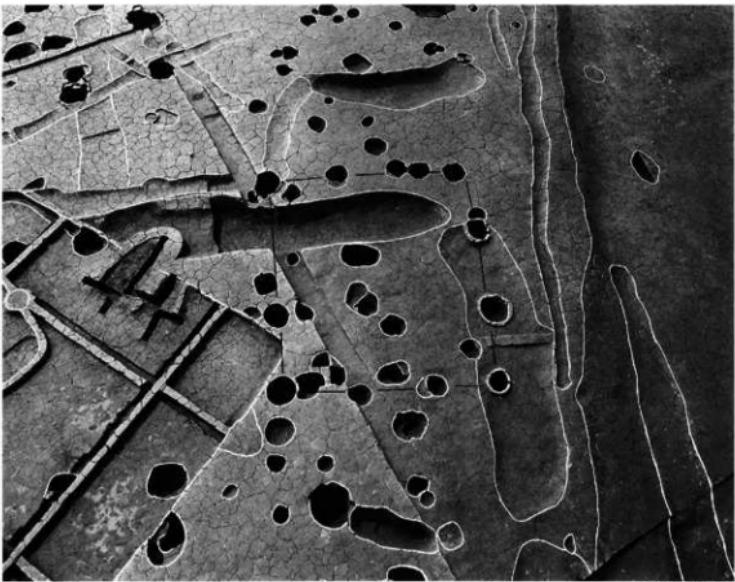
豊穴住居跡16カマド  
検出状況 (南より)



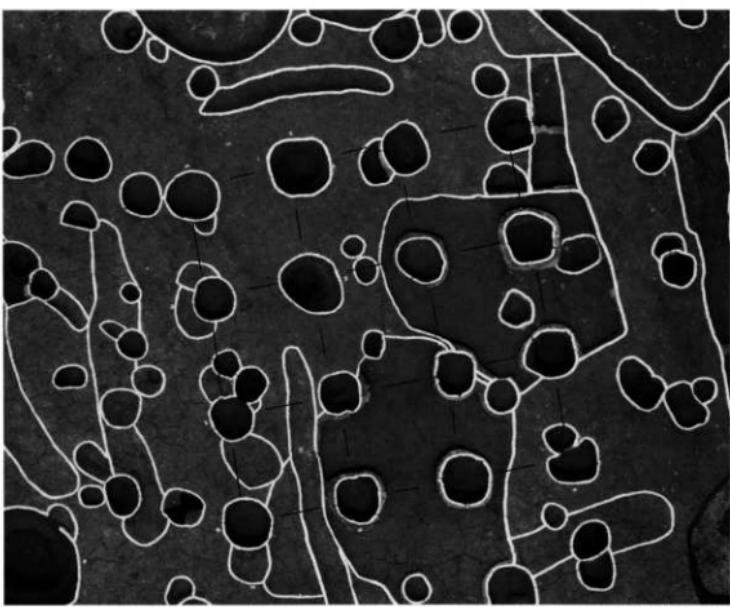
豊穴住居跡16カマド  
完掘状況 (南より)



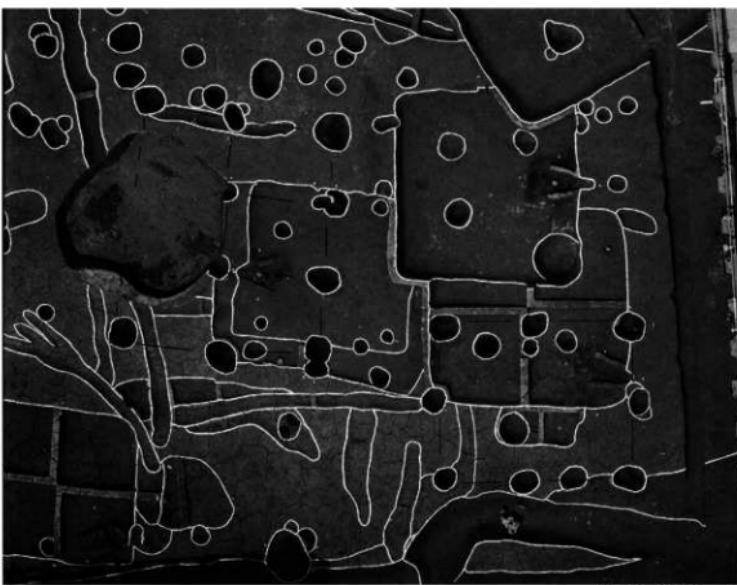
掘立柱建物跡 1



掘立柱建物跡 2



掘立柱建物跡 7



掘立柱建物跡 8・9



井戸690底面  
提瓶出土状況



井戸944  
木器出土状況（南より）



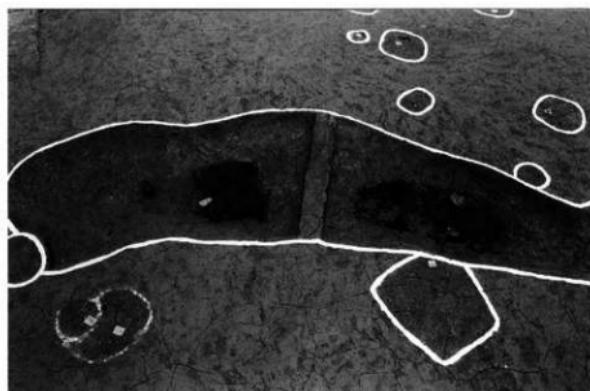
井戸944  
底面カゴ出土状況



井戸1168土層断面



井戸1168  
遺物出土状況



溝634  
遺物出土状況  
(西より)



土坑1120  
遺物出土状況（東より）



土坑1120  
土器出土状況（西より）



土坑1120  
鳥足紋土器近影



大溝上層  
遺物出土状況 1（西より）



大溝上層  
遺物出土状況 2（北より）



大溝上層  
遺物出土状況 3（南より）



大溝中層  
遺物出土状況 1 (北より)



大溝中層  
遺物出土状況 2 (東より)



大溝中層  
遺物出土状況 3 (東より)



大溝上層  
翫・提瓶出土狀況



大溝上層  
木製器出土狀況



大溝中層  
韓式系土器出土狀況



大溝中層  
木製縄出土状況



大溝中層  
さしば形木製品出土状況



大溝中層  
鉄製繩出土状況



堅穴住居跡出土土器（5世紀代）



堅穴住居跡出土土器（6世紀代）



大溝出土土師器



大溝出土須恵器



大溝出土韓式系土器



溝625出土須恵器大甕（右）、大溝出土須恵器甕（左）



溝1062出土遺物



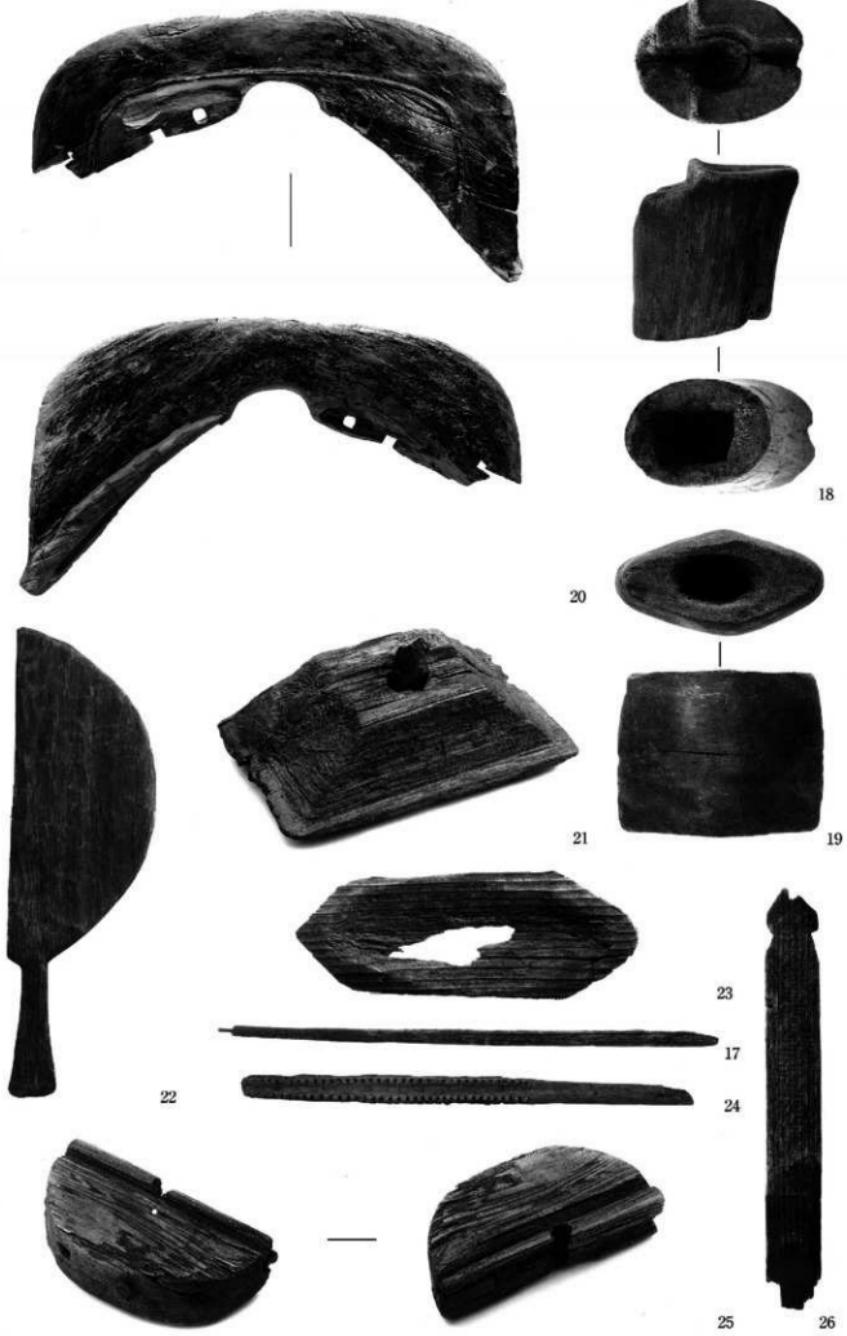
溝625出土遺物



出土鐵器・鹿角製品



出土木器 1



## 報告書抄録

ふりがな	しとみやきたいせきはくつちょうさがいよう しち							
書名	都屋北遺跡発掘調査概要・Ⅲ							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	岡田 賢							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	...	...			
しとみやきたいせき 都屋北遺跡	しじょうなわてし 四條畷市 しとみや すな 都屋・砂	27229	7 (51)	34° 44° 39°	135° 37° 52°	平成17年9月1日から 平成18年9月8日	2000m <sup>2</sup>	なわて水 みらいセ ンター建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
都屋北遺跡	集落跡・生 産域	古墳時代	住居址、井戸、 大溝、溝、土坑	陶質土器、輪式土器、 須恵器、土師器、U 字形板状土製品、製 塙土器、刀子、櫛など の鉄器、木製軸、 農具、弓、柄頭など 木器、鹿角製品等		古墳時代中期～後期に かけて形成された集落。 集落域を区画する大溝か ら出土した馬骨・馬齒、 木製軸などより馬糞集団 の集落である可能性が高 まった。		
要約	古墳時代中期～後期にかけて形成された集落。集落域の西端を限る大溝からは、須恵器、土師器をはじめ朝鮮半島系の土器、鉄器、木器、鹿角製品など多種多様な遺物が出土した。中でも木製軸（後輪）の出土は、過年度調査の鏡、轂と合せ、集落域から出土した馬具のセット関係がわかる資料で あるとともに、最古級の馬具としても貴重な事例である。							

## 藤屋北遺跡発掘調査概要・VII

発行日 平成21（2009）年3月31日

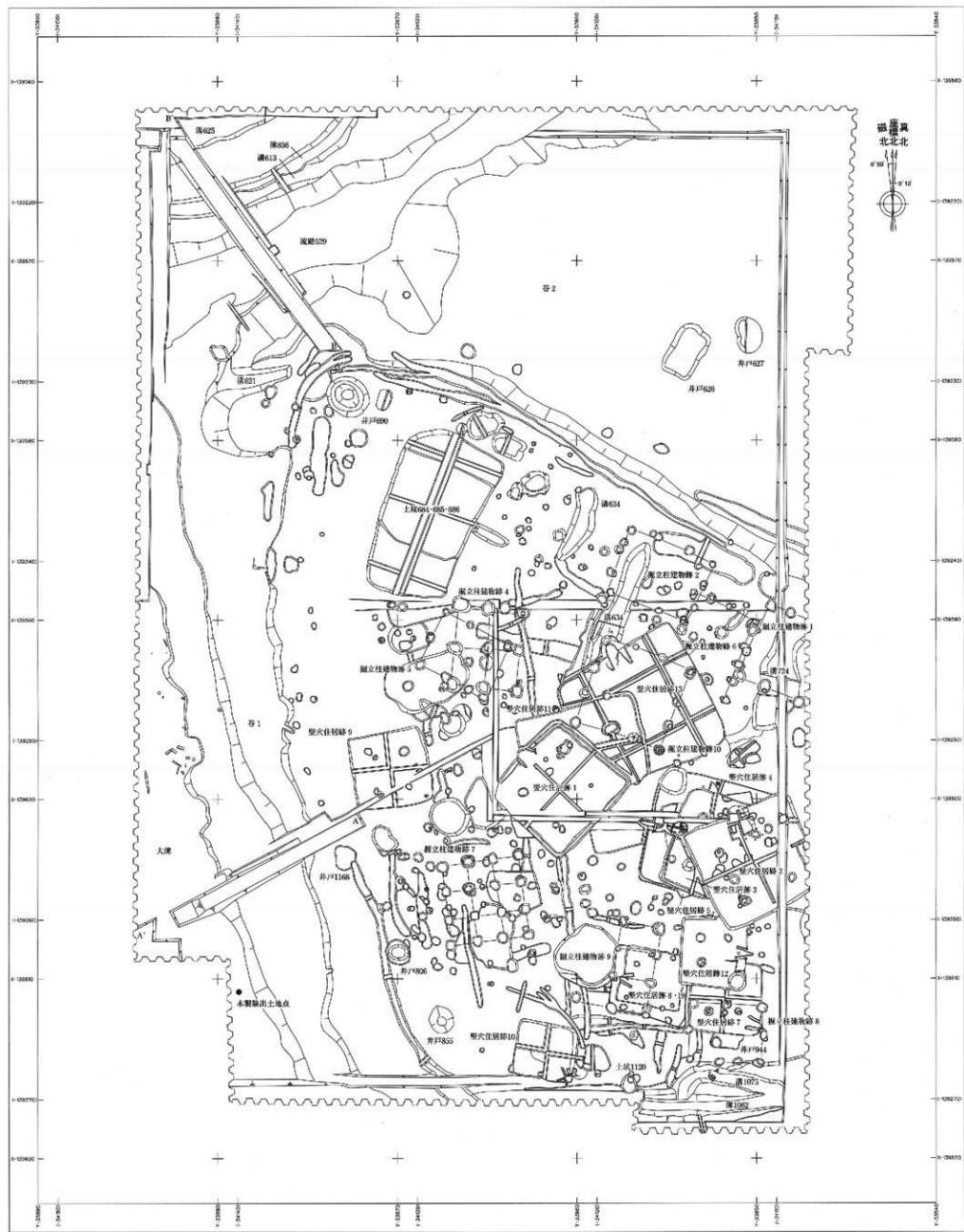
発 行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351

印 刷 石川特殊特急製本株式会社



付図 蔵屋北遺跡F調査区第13遺構面（古墳時代中・後期）平面図

